



第42回

九州地区学校図書館研究大会

佐賀大会研究集録

開催日 | 令和7年 10月2日 木・3日 金

九州地区学校図書館協議会



目次

CONTENTS

1	会長あいさつ	1
2	大会日程	2
3	基調提案	3
4	全国SLA報告	5
5	記念講演	10
6	分科会担当者一覧	11
7	分科会報告	
	第1部 第1分科会 A 図書館運営・小学校	13
	B 図書館運営・中学校	15
	C 図書館運営・高等学校	17
	第2分科会 D 利用指導・小学校	19
	E 利用指導・中学校	21
	F 利用指導・高等学校	23
	第2部 第3分科会 G 読書指導・小学校	25
	H 読書指導・中学校	27
	I 読書指導・高等学校	29
	第4分科会 J 学校司書・司書教諭との協働・小学校	31
	K 学校司書・司書教諭との協働・中学校	33
	L 学校司書・司書教諭との協働・高等学校	35
8	編集後記	37

第42回九州地区学校図書館研究大会 佐賀大会を終えて

九州地区学校図書館協議会
佐賀県学校図書館教育研究会
会 長 神 近 正



令和7年10月2日、3日の両日に開催いたしました第42回九州地区学校図書館研究大会佐賀大会は、九州各地から学校図書館に関わる皆様のご参加により成功裏に終えることができ、深く感謝申し上げます。

本大会は「豊かな心を育み、個別最適化された学びを支える学校図書館」を研究主題としてアバンセを会場に開催されました。学校図書館は、子どもの感性を磨き豊かな心を育む「読書センター」、また、自らの学びを磨き知識を広げる「学習センター」「情報センター」という役割に加え、ICTの効果的な活用も求められています。本大会において、参加の皆様に学校教育の中心的な役割を担う学校図書館づくりについて様々な角度から捉えていただくことにより、学校図書館教育の意義を再度認識していただき、学校図書館関係者の技量の向上を図りたいという思いで開催いたしました。

大会1日目は、実行委員会顧問、竜田徹様による基調提案や全国学校図書館協議会調査部長、磯部延之様による報告をはじめ、寺地はるな様・本間悠様による対談形式での記念講演を開催しました。記念講演では、本間様を進行役に、寺地様から創作活動や子どもの読書についての考えを聞かせていただきました。皆様のそれぞれの立場からのお話に読書の素晴らしさをあらためて感じることができ、豊かで有意義な時間となりました。また、1日目のアトラクションでは、伊万里実業高等学校太鼓部の皆さんに素晴らしい演奏を披露していただきました。熱気あふれる勇壮な和太鼓の響きと凜とした篠笛の響きが、大会に彩りを添えてくれました。

2日目の分科会は、第1部6分科会、第2部6分科会の計12分科会に分かれ、図書館運営、利用指導、読書指導、学校司書・司書教諭との協働の視点から24の実践発表および活発な意見交換、指導助言が行われました。どれも大変参考になり、多様な子どもたちの心を育む場としての図書館、子どもたちの学びに合った図書館を目指し、日々奮闘されている皆様の姿と意思が伝わってくるものでした。

子どもたちの未来を見据えつつ、日々、目の前の子どもたちのために何ができるかを懸命に考え、力を尽くされている皆様が、本大会を通じて、あらためて学校図書館づくりに夢を持ち、また、同じ志を持つ仲間とのつながりを感じてくださっていたら、幸いです。

大会の開催にあたりまして、様々な立場からご協力・ご支援いただきました皆様に衷心より感謝申し上げますとともに、今後も九州地区学校図書館協議会が児童生徒の学びに資することを祈念して大会終了の挨拶とさせていただきます。

大会日程

第1日 令和7年10月2日(木)

- 9:30~10:10 受付 (ホール前ホワイエ)
- 10:10~12:30 全体会 (ホール)
- 10:10~10:30 開会行事
- ◇開会の言葉 大会副実行委員長 前田 修之
 - ◇主催者あいさつ 佐賀県SLA会長 神近 正
 - ◇来賓あいさつ 佐賀県教育長代理 学校教育課課長 山口 明德
 - ◇来賓紹介 大会副実行委員長 池田 忠徳
- 10:35~11:05 基調提案 大会顧問 佐賀大学大学院 竜田 徹
- 11:20~12:20 全国SLA報告 全国SLA調査部長 磯部 延之
- 12:20~12:30 諸連絡
- 12:35~12:55 アトラクション 佐賀県立伊万里実業高等学校 太鼓部 演奏
- 12:30~13:30 昼食・休憩
- 13:30~15:00 記念講演 (ホール)
- ◇講師紹介
 - ◇記念講演 講師 寺地 はるな 氏、進行 本間 悠 氏
演題 「佐賀の思い出と子ども時代の読書」
 - ◇お礼の言葉
- 15:00~15:10 次期開催県(福岡県)あいさつ 福岡県学校図書館協議会会長 原 正和
- 15:10~15:15 閉会行事
- ◇閉会の言葉 大会副実行委員長 前田 修之
- 15:30~16:30 分科会打合せ(各分科会会場)／記念講演講師著書の販売・サイン会
- 17:00~18:30 学校図書館を語る集い(グランデはがくれ)

第2日 令和7年10月3日(金)

- 9:15~ 9:30 受付(各分科会会場)
- 9:30~10:50 分科会第1部
- 発表者・助言者等自己紹介(5)
 - 発表1(20)
 - 発表2(20)
 - 質疑・応答(20)
 - 指導助言(15)
- 10:50~11:10 移動
- 11:10~12:30 分科会第2部
- 発表者・助言者等自己紹介(5)
 - 発表1(20)
 - 発表2(20)
 - 質疑・応答(20)
 - 指導助言(15)
- 12:30~12:35 閉会行事

	テーマ	校種	記号	会場
第1部	図書館運営	小	A	ホール
		中	B	第4研修室
		高	C	第2研修室
	利用指導	小	D	第1研修室B
		中	E	第3研修室
		高	F	第1研修室A

	テーマ	校種	記号	会場
第2部	読書指導	小	G	ホール
		中	H	第3研修室
		高	I	第2研修室
	学校司書・ 司書教諭との 協働	小	J	第1研修室B
		中	K	第4研修室
		高	L	第1研修室A

豊かな心を育み、個別最適化された学びを支える学校図書館

佐賀大学大学院学校教育学研究科 准教授 竜 田 徹

学校図書館は今、子どもたちの「豊かな心」を育む場として、そして一人ひとりの学びを支える拠点として、あらためてその意義が問われています。個別最適化された学びが求められる時代において、すべての子どもが自分のペースで、自分に合った方法で学ぶことができるようにするために、学校図書館にできることは何か。本提案では、その問いに対して「読書量のとらえ直し」という視点を例にとって、考えてみたいと思います。

学校図書館における読書活動は、長らく「読んだ本の冊数」によって量的に評価されることが多くありました。たとえば「年間〇〇冊読もう」といった目標や、読書手帳への記録などが典型的です。もちろん、これらは子どもたちの読書習慣の形成に一定の役割を果たしてきました。しかし、「何冊読んだか」だけで読書の質や深まりを測ることはできるのでしょうか。

ここで改めて考えてみたいのは、学習者は「一冊の本」というものをどのように捉えているのかということです。全国学校図書館協議会と毎日新聞社が2017年に実施した第63回学校読書調査では、「ライトノベルだから」という理由で読んだ本を「0冊」と回答した生徒の存在が明らかになっています。つまり、実際には本を読んでも、「これは読書とは言えない」と自ら判断し、読書経験としてカウントできない中学生がいたのです。この生徒自身がそのように自律的に判断したのかもしれませんが、ライトノベルについて大人から否定的な指摘を受けたのかもしれませんが。

現代の子どもたちは、アニメやマンガとリンクしたライトノベル、Web連載小説、電子書籍など、多様な媒体を通じて読書に触れています。読書教育を研究する上田祐二氏は、「ライトノベルの特質、またそのアニメ、マンガとの浸透性を前にすると、活字による本のみを読書だと見なすというのも、今日の読書をとらえる上では窮屈になってきています」と指摘しています。

このように、現代の読書はすでに多様化・複合化しており、「一冊、二冊……」という単位での読書量のカウントは、子どもたちの実態にそぐわなくなっています。それでも私たちは、つい「何冊読みましたか？」と尋ねてしまいがちです。すると、子どもたちもまた、「一冊」の基準に自らを合わせようとし、読書の幅がかえって狭まってしまうことになるのです。

では、これからの学校図書館は、どのようにして子どもたちの読書を支えていけばよいのでしょうか。一つの方向は、「読書量を評価するための新しい言葉や単位」を、子どもたちとともに考えていくことではないでしょうか。

たとえば、「今年の自分の読書量を、読破した本の数ではなく、心に残った本の数でカウントしてみよう」と提案してみる。「ひと月に何冊読むか」より「何時間読むか」を大切にしてみる。あるいは「新聞の連載小説も読書に入るのかな？」といった素朴な問いを、子どもたちと一緒に考えてみる。そうした姿勢こそが、読書という営みを豊かにし、一人ひとりにとっての「最適な読書」への道をひらくのではないのでしょうか。

読書を評価するというのは、子どもたちの読書を点数化することではありません。それは、子どもたち一人ひとりがどのように読書に向き合っているかを丁寧にみとり、その子にとっての「次の一冊」「明日の読書」を応援していく営みです。そのような読書支援を日常の中で支えられるのが、学校図書館の強みであり、司書教諭や学校司書の役割の根幹なのだと私は考えます。

2025年度、佐賀県では「さが本恋プロジェクト」が始動しました。「忘れられない1冊の本と出会い、キミも本と恋に落ちてみませんか？」というこの呼びかけは、読書への入り口が冊数や形式ではなく、〈こころが動く出会い〉であることをあらためて教えてくれます。学校図書館には今、子どもたちが本との出会いにときめき、読書を通じて、その子どもなりの〈読書についての言葉〉を育む場となることが求められているのではないのでしょうか。

最後になりましたが、第42回九州地区学校図書館研究大会佐賀大会にお越しいただきましたことに、心より感謝申し上げます。大会期間中は、どうぞ県を越えた交流をお楽しみください。

第39回大会の基調提案で長崎県SLA顧問の山本みづほ先生は、「日々の学校図書館運営の悩み、なかなか動かなかった学校司書配置、授業時数削減のないままの司書教諭の業務の行き詰まり。分科会でたまたま隣り合った席に座り話をしたこと、さまざまなヒントや資料を戴いたことが多々ありました。『諦めたらそこで終わり』だと、常に前を向いて学校図書館に関わり続けることができたのは、図書館大会での出会いがあったからこそです」とお書きになっています。

この言葉を拝読して、私はまさに「この場」こそ「学校図書館」だと感じました。

佐賀県は学校図書館活動や読書活動が大変活発に行われている地域の一つです。令和4年度には、県の「子育てし大県“さが”プロジェクト」の一環として、学校における子どもたちの読書活動の一層の推進を図ることを目的に、令和4年度「スクール読書チャレンジ運動」が実施されました。その優れた実践の一部は県のホームページでも公開されています。また、先述したとおり本年度は「さが本恋プロジェクト」が展開されています。

それぞれの現場では、支援の手が十分に届かず、孤立した状況で奮闘されている方も少なくありません。しかし、ここにお集まりの皆さまは、そうした困難の中でも、学校図書館を夢と希望に満ちた場にしたいという熱意を持っておられる方々です。きょうは皆さま同士、気軽に声をかけ合い、この佐賀の地での大会から一つでも多くのものを持ち帰っていただけたらと願っています。

【参考文献】

- 上田祐二（2015）「マルチメディア時代の読書とその教育」山元隆春編『読書教育を学ぶ人のために』世界思想社
- 竜田徹（2024）「『読書についての言葉』を育成する国語科学習指導―読書指導の意義と内容に関する一提案―」九州地区国立大学教育系・文系研究論文集、第10巻第2号
- 佐賀県まなび課（2025.6.20）「さが本恋プロジェクト」
<https://sagahonkoi.pref.saga.lg.jp/>（2025年7月25日確認）
- 佐賀県まなび課（2023.3.3）「令和4年度「スクール読書チャレンジ運動」の取組結果をお知らせします」
<https://www.pref.saga.lg.jp/kiji00395469/index.html>（2025年7月25日確認）

学校図書館の現状と課題

公益社団法人学校図書館協議会

調査部長 磯部延之

I 学校図書館を取り巻く現状

(1) 学びを深め、心を豊かにする学校図書館

●読書は復興の礎となる

…戦後、教育が大きく転換し、学校図書館の役割が注目されるようになった。

●1953年に学校図書館法が成立、直後に西日本読書感想画コンクールが開始

…読書は自由な発想を生み出し、民主主義を支える。学校図書館、公共図書館も読書の環境があるということは、子どもたちの心を豊かにしていく。

●高度成長の時代を知識偏重の教育が支え、その中で点数が優先するような時代に

…全国の学力調査で上位の都道府県は、ベテランの先生が子どもの成長を思って教育に携わっていると思われるが、若い先生に技術や思いをどう伝えるかが課題。学校司書、司書教諭の配置が一枚に一人では、異動によりシステムや思いがうまくバトンタッチできないかもしれない。学びの力として学校の中で生かしていくために、より条件を整えていく必要がある。

●情報機器の進化とゆとり教育への回帰

…多様な学びへの思いは尊重されるが、対応は停滞。予算も時間も人も知識も技能も追いつかないのが現状か。

●新しい学習指導要領の方向性

① 主体的、対話的で深い学び

…前の指導要領から継続事項。5年、10年でできることではない。

② 個別最適、一人一人に合った学びの保証

…保証のために先生方の考え方を変えていくということ。同時に、学校図書館が上手に活用されるようにしていくことが大切。

③ 情報機器の活用

…電子教科書も検定の対象になる見込み。情報機器をうまく活用する必要がある。

④ 教育課程の弾力化

…授業時間や特定の教科、その地域にあった教科内容の弾力的運用。学校図書館の活用、あり方も問われてくる。

●読書の価値の再認識

2000年 子ども読書年

2001年 子ども読書活動の推進に関する法律

…5年ごとに更新。多様な区分けがされた上で、読書環境全般にわたって書かれている。
今は第5次が出ているが、第1次からを含め、今までに出てきたいろいろな視点や提言を大事にしてほしい。

2016年 学校図書館ガイドライン

…学校図書館の運営について書かれている。今、新しく書き換える話も出ているが、現行のものも素晴らしい内容なので大事にしてほしい。

●バリアフリーの浸透

●GIGAスクール構想の展開

(2) 国の施策

① 第5次「子ども読書活動推進基本計画」の策定

…学校図書館は学校教育の中心、中核的な役割を担うことが期待されている。

② 第6次「学校図書館整備等5か年計画」

…令和4年度～8年度図書 995億円

・新聞 190億円（1校に小学校2紙、中学校3紙、高校5紙）

国の方で地方交付税として予算がついているが、現実には各都道府県において予算化されないこともあるのが問題点。学校司書の措置についても同じことが言える。

③「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」

「視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する法律」

…ぜひ目を通してほしい。合理的な配慮が求められている。

(3) 学校図書館の経営と運営

① 学校図書館の3つの機能——読書センター、学習センター、情報センター

…学校図書館は児童生徒の興味関心に応じて、自発的かつ主体的に読書学習を行う場であるとともに、多様な資料等を介して創造的な活動を行う場。学校図書館は、児童生徒が落ち着いて読書活動に取り組むことができるよう、安らぎのある環境を整えるとともに知的好奇心を育む開かれた学びの場としての環境を整えることが求められる。

本だけが資料ではない。学校図書館は本が置いてある場所ではなく、子どもたちに語りかけてくれるいろいろな宝物がある場所が学校図書館だと考えていけばいい。さらには、人。このことならばこの人が詳しい、と紹介してあげられるような教職員であり、学校図書館であってほしい。

② 校長は学校図書館の館長である

…2016年のガイドラインの中に明記されている。学校図書館は子どもたちや教員に対してワンダーランドでなければいけない。そう考えると、学校図書館は校長先生に味方になってもらうことは大事。学校図書館の経営方針をしっかりと学校の教育課程に位置づけているか。学校図書館の活用を欠いては、児童生徒の主体的、対話的で深い学びが十

分に期待できない。

(4) 全国SLAの活動

全国学校図書館協議会を要として全国61組織。全国の組織がもっと全国学校図書館教委員会を活用し、密接になってほしい。全国の組織がいろんな全国の情報を持っていることで、より大切な要望を国の方に働きかけることができる。

●全国学校図書館協議会の活動

- ・機関誌、としょかん通信 等の刊行
- ・図書費の増額、学校司書の配置促進 等の提言
- ・基準等の提案…司書教育学校司書の職務の整理、学校図書館メディア基準の改訂、学校図書館廃棄基準の改訂、学校図書館選資料選定モデルプランの作成、探究学習の指導体系の改訂
- ・選定…基本選定、課題図書、指定図書、緑陰図書、えほん50
SLBA（全学校図書館図書整備協会）選定図書
- ・研究研修…全国大会、地区大会、指導者時、学校司書を対象とした研修等
- ・調査…学校読書調査、学校図書館調査等
- ・顕彰
- ・コンクール
- ・寄付・募金…被災地の方への支援等

II 学校図書館を巡る状況と課題

⇒第6次学校図書館図書整備等5か年計画

⇒第5次子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画

⇒第2期視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する基本的な計画

(1) 司書教諭、学校司書の状況

① 司書教諭の配置

[資料] 司書教諭・学校司書の11学級以下の発令校

小学校：30.5%、中学校：31.3%、高等学校：34.9%、
特別支援学校（小学部）：26.1%

② 学校司書の配置

[資料] 学校司書の常設配置校

小学校：9.7%、中学校：10.9%、高等学校：51.2%

…配置されている学校自体は7～6割あるが、小中学校の常設配置校は1割程度というのが実情。学校司書が複数の学校を掛け持ちしている点について、対応を考えたり、要望を出したりしていく必要がある。

(2) 学校図書館の予算化状況

[資料] 図書費の予算

令和6年度：小学校 47.9万円、中学校 68.8万円、高等学校 104.5万円

…一番苦しいのは特別支援学校。図書館も形ばかりで予算がほとんどついていないところが多い。

(3) 学校図書館の整備状況

[資料] 図書の整備（蔵書冊数の年次変化）

…予算は増えていないが図書の単価が上がっているので、増加冊数が減っている。

[資料] 過去31年分の5月1ヶ月間の平均読書冊数の推移グラフ

…小学校は、冊数は多いが、読む本がどんどん短く、薄いものになっている。冊数よりも、どんな本を読んでいるか、どんな資料に当たっているか、どれだけ子どもの中に入っているのか、そこをじっくり見極めていく必要がある。それを見極める一つの方法が、読書感想文であり、読書感想画である。これらを読む、見る、読み取ることは、子どもたちが今どんな読みをしているのか、どんな心持ちでいるのかを読み取るよい手立てである。

今年の結果として小学校、中学校、高校ともに冊数が減っている。背景の一つに朝の読書など全校一斉に読書を行う時間がどんどん削られているという実情がある。子どもたちが本を読む時間がなかなか確保できない。タブレットを使っていろいろな学習をするのに時間を取られてしまうということもあるか。

[資料] 不読率の推移グラフ

…不読率は一時期減少したが、現在は増加の傾向。

[資料] スマホやタブレットを使った電子書籍による読書の経験

…小学校、中学校、高校ともに電子書籍に関しての読者はほとんどいない。中学、高校でやっと1パーセントほど。電子書籍は、最初こそ増えたが、その後ずっと頭打ちの状態である。

[資料] 内容を理解しやすいのは「紙の本」か「電子書籍」か

…本の内容を理解しやすいのは「紙」または「どちらも変わらない」という回答が、小学校で7割から高校で8割程度。一方、情報量が豊富なのは電子書籍と捉えている。紙の方がよくわかるが、情報量は電子の方が多いという受け止め方をしていることがうかがえる。

[資料] 学校図書館の整備方針

…整備方針としては、「学習に役立つ図書の充実」が圧倒的に多い。また、「児童生徒の憩いの場に」ということを考えている学校も結構多い。その他に多いのは、「情報発信で活用される図書館に」という方針。従来は、図書館に来てください、来てもいいですよ、という対応だったが、今は、図書館は素敵なんだ、発見がいっぱいある場所なのだという情報を発信して、先に述べたワンダーランドという言葉に当てはまるような学校図書館を目指しているところが多い。ただ、残念ながら「学習スペースの確保」は高校が中心で、小学校ではなかなか増えていかない。また、「子どもたちの学習成果の展示による充実」とい

う点についても、まだ手が届かないという状況になっている。

Ⅲ 課題と展望

(1) 新しい学習指導要領～今、なぜ「探究学習」なのか

新しい学習指導要領については前述のとおり。学校図書館の活用では課題を作成し、解決に向けて学校図書館メディアを活用して主体的色を協同的に学ぶ学習が求められている。本を読むだけが学校図書館ではない。「知る」よりも「気づく」力、「見つける」よりも「考える」力が大事。

現行の学習指導要領に掲げられた「主体的、対話的で深い学び」とは、「子どもたち自身が考える授業をやりましょうよ」ということ。情報を伝達するための授業ではなく、子どもたちがいろんな情報から考えるような場面をたくさん作ってほしい。それが学習指導要領の「主体的、対話的で深い学び」の中身だと考える。

新しい学習指導要領では、学校図書館を主体的に活用することにより、児童生徒の学びが深まるような学校図書館経営が求められているということ。

(2) これからの取組

① 学校図書館をつくる、② 子どもを変える、③ 授業を変える、④ 学校図書“観”を変える

今だけでなく未来を生きる子どもたちを育てている。学校図書館を作るだけでなく、子どもを変える、授業を変える、そして学校図書館とはどういうものなのか、という「学校図書“観”」を変えるという取り組みに広げていってほしい。

記念講演

演題 「佐賀の思い出と子ども時代の読書」

|講師| 寺地 はるな 氏

1977年佐賀県生まれ。大阪府在住。2014年『ビオレタ』で第4回ポプラ社小説新人賞を受賞し2015年デビュー。他の作品に『そういえば最近』(U-NEXT)、『雫』(NHK出版)、『リボンちゃん』(文藝春秋)、『架空の犬と嘘をつく猫』、『わたしの良い子』(中央公論新社)などがある。



【撮影：山本まりこ】

|進行| 本間 悠 氏

1979年生まれ北海道室蘭市出身。2016年より明林堂書店に勤務。カリスマ書店員として脚光を浴びる。現在は2023年佐賀駅に開店した佐賀之書店にて店長を務める。書店業務の傍ら、新聞・雑誌への書評の寄稿や、サガテレビの情報番組へのコメンテーター出演、講演活動など、読書の楽しさを広める活動を精力的に行っている。



今回の記念講演では、本間悠氏に会を進行していただきながら、寺地はるな氏の本との思い出や佐賀との関わり、読書に対する思いなどについてお話を聞かせていただきました。

以下に、参加者の感想を紹介し、記録にかえさせていただきます。

感想より

- ・本を読むことに決まりはなく、必要な時に本の力が発揮されて、わからないことを知ることでも大事だという言葉に、目からうろこが落ちた感じがしました。最後まで読んで何かを得るのではなく、途中でやめても、わからなくてもいいのだと思うとハードルがさがるので、本の苦手な児童にも声かけしてみようと思いました。
- ・読み終えた本の隣に並んでいた本をたどるように選んでいろいろな本を読むようになった。とおっしゃっていました。子どもたちに「おすすめの本は」「面白い本は」と聞かれたときにすすめてみようと思います。
- ・子どもの興味を否定せず、いろいろな方向性のドアを用意して気持ちが動くまで待つ。必要と感じれば読むようになる。とお話しされましたが待つことも大切だと気づかされました。
- ・「おもしろくない本に出合い、たいしたことのない時間を使うこと」「わからなさを感じる」「途中で読むのをやめてもよい」ということばがおもしろく、嬉しく思いました。
- ・結局、人間は脳の中で、言語で思考していることを話されたときは、小学校教育の中でなにができるのかな、と考えさせられました。
- ・本に即効性を求めすぎている傾向があるというお話から、「ピンとこない本(好みではない本)に出あえたこともいい体験、そっちの方が覚えていることがある」や、「おもしろい本探しには、コスパを考えなくてもよく、読み漁ることのできる図書館が最適」ということに納得しました。

分科会報告

分科会担当者一覧

第 1 部

分科会	担 当	所 属	職 名	氏 名
図書館運営	A 小学校 ホール	発表 1	福岡県 大牟田市立倉永小学校	学校司書 赤 木 美 和
		発表 2	佐賀県 佐賀市立勤興小学校	教諭 大 西 章 子
			佐賀県 佐賀市立諸富北小学校	教諭 大 田 原 佳 子
			佐賀県 佐賀市立本庄小学校	教諭 山 田 尚 太
			佐賀県 佐賀市立開成小学校	教諭 武 藤 郁 美
		指導助言	沖縄県 南風原町立北丘小学校	校長 上 原 千 秋
		司会	佐賀県 唐津市立肥前小学校	教諭 宮 崎 琴 香
	B 中学校 第 4 研修室	記録	佐賀県 唐津市立鏡山小学校	教諭 諸 熊 美紀子
		記録	佐賀県 唐津市立東唐津小学校	教諭 小 松 涼
		会場責任者	佐賀県 唐津市立高島小学校	教諭 砂 原 未 来
		発表 1	宮崎県 宮崎市立佐土原中学校	教諭 菊 地 明日香
		発表 2	佐賀県 吉野ヶ里町立三田川中学校	教諭 片 江 生 芽
		指導助言	佐賀県 多久市立図書館	館長 辻 成 美
		司会	佐賀県 唐津市立佐志中学校	教諭 前 川 千 夏
	C 高等学校 第 2 研修室	記録	佐賀県 唐津市立七山中学校	教諭 下 尾 智 美
		記録	佐賀県 唐津市立北波多中学校	教諭 若 林 匠
		会場責任者	佐賀県 唐津市立西唐津中学校	教諭 宮 原 典 江
		発表 1	沖縄県 沖縄県立小禄高等学校	教諭 平 良 裕 美
		発表 2	長崎県 鎮西学院高等学校	学校司書 今 村 節 子
		指導助言	福岡県 久留米市立城島図書館	館長 原 章
		司会	佐賀県 佐賀県立鳥栖高等学校	教諭 高 木 晃 代
利用指導	D 小学校 第 1 研修室 B	記録	佐賀県 佐賀県立ろう学校	実習教師 笹 部 美 佳
		記録	佐賀県 佐賀県立金立特別支援学校	教諭 中 山 奈 美
		会場責任者	佐賀県 佐賀県立有田工業高等学校	教諭 堤 明日香
		発表 1	宮崎県 日南市 (共立ソリューションズ)	学校司書 多 田 明 子
		発表 2	佐賀県 伊万里市立南波多郷学館	教諭 原 口 椋 汰
		指導助言	熊本県 美里町立砥用小学校	校長 上 塚 浩一郎
		司会	佐賀県 唐津市立浜崎小学校	教諭 金 丸 知 恵
	E 中学校 第 3 研修室	記録	佐賀県 玄海町立玄海みらい学園	教諭 古 館 奈津子
		記録	佐賀県 唐津市立外町小学校	教諭 田 邊 由 実
		会場責任者	佐賀県 佐賀県立唐津東高等学校	教諭 松 本 千 春
		発表 1	大分県 豊後高田市立河内中学校	教諭 田 中 智 也
		発表 2	佐賀県 白石町立白石中学校	教諭 星 山 真 慶
		指導助言	佐賀県 伊万里市民図書館	統括管理者 鴻 上 哲 也
		司会	佐賀県 鹿島市立東部中学校	教諭 中 西 久仁子
	F 高等学校 第 1 研修室 A	記録	佐賀県 太良町立大浦中学校	教諭 森 葵
		記録	佐賀県 嬉野市立吉田中学校	教諭 山 口 真莉子
		会場責任者	佐賀県 太良町立多良中学校	教諭 熊 本 日奈乃
		発表 1	福岡県 福岡県立香椎高等学校	学校司書 関 岡 陽 子
		発表 2	熊本県 熊本県立八代清流高等学校	教諭 野見山 俊 博
		指導助言	長崎県 長崎純心大学	非常勤講師 山 本 みづほ
		司会	佐賀県 弘学館高等学校	教諭 松 本 美 弥
		記録	佐賀県 佐賀県立伊万里実業高等学校	教諭 岡 本 長 子
		記録	佐賀県 敬徳高等学校	教諭 川 崎 央理絵
		会場責任者	佐賀県 佐賀県立伊万里実業高等学校	教諭 杵 島 真 菜

第 2 部

分科会		担 当	所 属	職 名	氏 名
読 書 指 導	G 小学校 ホール	発表 1	鹿児島県 霧島市立国分西小学校	教諭 学校司書	下 村 陽 子 久保田 智 子
		発表 2	佐賀県 嬉野市立塩田小学校	教諭	富 永 久 美
		指導助言	鹿児島県 鹿児島市立草牟田小学校	校長	加 峯 美由紀
		司会	佐賀県 神崎市立脊振小学校	教諭	田 川 桂
		記録	佐賀県 吉野ヶ里町立三田川小学校	教諭	河 内 美也子
		記録	佐賀県 吉野ヶ里町立東脊振小学校	校長	鶴 田 剛 大
		会場責任者	佐賀県 神崎市立西郷小学校	教諭	合 田 佳 織
	H 中学校 第 3 研修室	発表 1	沖縄県 八重瀬町立東風平中学校	学校司書	眞 座 孝 乃
		発表 2	佐賀県 唐津市立湊中学校	教諭	秋 元 美 保
		指導助言	佐賀県 伊万里市立南波多郷学館	校長	多久島 一 仁
		司会	佐賀県 唐津市立第五中学校	教諭	秋 山 いづミ
		記録	佐賀県 唐津市立相知中学校	教諭	井 上 瑠 瑶
		記録	佐賀県 唐津市立浜玉中学校	教諭	中 島 和 哉
		会場責任者	佐賀県 佐賀県立唐津東高等学校	教諭	原 奈緒子
	I 高等学校 第 2 研修室	発表 1	大分県 大分県立大分豊府高等学校	教諭 学校司書	阿 南 嘉 恵 阿 野 卓 也
		発表 2	佐賀県 佐賀県立佐賀商業高等学校 佐賀県 佐賀県立佐賀西高等学校	教諭 教諭	式 町 都茂子 野 田 香奈子
		指導助言	大分県 大分大学教育学部	教授	花 坂 歩
		司会	佐賀県 佐賀県立佐賀農業高等学校	講師	古 家 義 識
		記録	佐賀県 佐賀県立神埼清明高等学校	教諭	堀 田 勇 人
		記録	佐賀県 佐賀県立致遠館高等学校	教諭	野 副 祐 未
		会場責任者	佐賀県 佐賀県立有田工業高等学校	教諭	堤 明日香
学 校 司 書 ・ 司 書 教 諭 と の 協 働	J 小学校 第 1 研修室 B	発表 1	長崎県 時津町立時津北小学校	教諭 学校司書	森 山 友 子 田 平 理 栄
		発表 2	佐賀県 鳥栖市立若葉小学校	教諭	小 野 華 恋
		指導助言	佐賀県 嬉野市立塩田小学校	校長	川 原 俊 彦
		司会	佐賀県 鳥栖市立弥生が丘小学校	教諭	永 松 笑 美
		記録	佐賀県 鳥栖市立鳥栖小学校	教諭	松 永 留美子
		記録	佐賀県 鳥栖市立鳥栖北小学校	教諭	今 里 裕 美
		会場責任者	佐賀県 鳥栖市立田代小学校	教諭	小 野 和 奏
	K 中学校 第 4 研修室	発表 1	熊本県 八代郡氷川町立竜北中学校	教諭 学校司書	木 原 まゆみ 本 田 道 代
		発表 2	佐賀県 多久市立東原庁舎西溪校	教諭 学校司書	樋 口 賢 太 古 賀 麻理子
		指導助言	宮崎県 教育庁義務教育課	指導主事	吉 田 健太郎
		司会	佐賀県 多久市立東原庁舎東部校	教諭	栗 丸 奈央子
		記録	佐賀県 多久市立東原庁舎西溪校	教諭	坂 本 つやみ
		記録	佐賀県 小城市立小中一貫校芦刈観瀾校	教諭	阪 口 真 悟
		会場責任者	佐賀県 小城市立小城中学校	教諭	井 上 華 花
	L 高等学校 第 1 研修室 A	発表 1	鹿児島県 鹿児島県立開陽高等学校	専門員	大 西 飛 鳥
		発表 2	佐賀県 佐賀県立高志館高等学校 佐賀県 龍谷高等学校	教諭 学校司書	瀬 口 鈴 香 香 月 浩 子
		指導助言	佐賀県 佐賀県立武雄高等学校	校長	岡 祐一郎
		司会	佐賀県 佐賀女子高等学校	教諭	金 崎 直 幸
		記録	佐賀県 佐賀清和高等学校	教諭	重 松 享 子
		記録	佐賀県 佐賀県立白石高等学校	教諭	秀 島 絵 里
		会場責任者	佐賀県 佐賀県立伊万里実業高等学校	教諭	杵 島 真 菜

A

[小学校] 図書館運営

〔発表者 1〕	福岡県 大牟田市立倉永小学校	学校司書	赤 木 美 和
〔発表者 2〕	佐賀県 佐賀市立勸興小学校	教 諭	大 西 章 子
	佐賀県 佐賀市立諸富北小学校	教 諭	田 原 佳 子
	佐賀県 佐賀市立本庄小学校	教 諭	山 田 尚 太
	佐賀県 佐賀市立開成小学校	教 諭	武 藤 郁 美
〔助 言 者〕	沖縄県 南風原町立北丘小学校	校 長	上 原 千 秋
〔司 会〕	佐賀県 唐津市立肥前小学校	教 諭	宮 崎 琴 香
〔記 録〕	佐賀県 唐津市立鏡山小学校	教 諭	諸 熊 美 紀 子
	佐賀県 唐津市立東唐津小学校	教 諭	小 松 涼
〔会場責任者〕	佐賀県 唐津市立高島小学校	教 諭	砂 原 未 来

1 実践発表

(1) 発表1 「仲間・家族・地域とつながる学校図書館運営」

- ① 学習センター、情報センターとしての利活用
 - 年間計画に基づく計画的な利活用
 - 校内研究における学校図書館教育の推進
- ② 読書センターとしての利活用
 - 推薦図書コーナーの設置
 - クラホンファミリーを活用した環境整備
 - 大牟田市立図書館との連携
- ③ 仲間とつながる読書活動
 - クラホンファミリーの活用
 - 図書委員会の活動
- ④ 家族とつながる読書活動
- ⑤ 地域とつながる読書活動
 - 保護者による読み聞かせ
 - 読書ボランティア（朗読座）による読み聞かせ
 - 校区内の中学校や高等学校の生徒による読み聞かせ
 - 本校児童による読み聞かせ
- ⑥ 成果と課題



クラホンファミリーを活用・掲示することで、児童の図書館や本に対する興味・関心を高めることができた。また、長年家庭や地域と連携した読書活動に取り組んだことで、「家族読書」の仕組みづくりができ、「読み聞かせの輪」が広がり、仲間・家庭・地域のつながりがより深まった。今後は、低学年から本に親しむ環境づくりに努め、学校で本を読む時間を捻出し読書の習慣化を図ることで、児童の読書量の個人差の縮小をめざす。さらには、図書資料とICTの融合を図った授業づくりや新聞を活用したNIE教育の充実を図り、学校図書館の質的向上をめざす。

(2) 発表2 「子どもたちの夢をかなえる学校図書館～豊かな心を育み、個別最適化された学びを支える学校図書館の研究～」

- ① はじめに

佐賀市内には小学校35校、中学校18校があり、市立小中学校全てと佐賀市立図書館をネットワークで結び、資源共有を活かした図書館教育の取り組みを行っている。
- ② 取り組みの事例

(ア) 教育課程…佐賀市西部：中規模校

 - ・佐賀市では、学校教育目標を基に学校図書館教育の基本方針を作成し、そこから読書指導と利用指導に分けて、低・中・高でさらに具体的な目標を設定している。
 - ・児童の発達に即した読書生活を営ませることを目的として「読書指導」、学校図書館を計画的に利用するために各学校の学習内容や実態と照らし合わせて「利用指導」を作成した。
 - ・計画的な図書館指導を達成するために、児童の学びを支える学校図書館をめざし、教科書と照合しながら図書館利用の年間指導計画を作成した。
 - ・学校のエデュケーション全体と読書指導が連携していくために、各教科・道徳・総合的な学習の時間・特別活動・教育課程外活動の中で図書館教育が担う役割について検討と実践を行った。
 - ・成果として、図書館教育が学校教育の様々な面で、児童の学習や読書生活を支えるものとして機能した。また、年間指導計画を作成することで、教科の学習に関連する内容を見通せるものになった。
 - ・今後、「佐賀市電子図書館」の活用状況を向上させていきたい。

(イ) 図書委員会…佐賀市中部：中規模校

- ・子どもと一緒に創る図書館をめざし、「本を大切にしてお気に入りの小学校」という目標を立てた。
- ・図書委員会の児童が、司書教諭が発行する「図書館だより」とは別に図書館まつりの様子を伝えたりする「図書委員だより」を毎月1枚発行したり、好きな本を紹介したりして、本の魅力を伝えた。
- ・読み聞かせ会や本みくじ、スタンプラリー、ビブリオバトル、しおりコンクールなど、児童主体で図書館まつりの計画・準備・実施を行った。
- ・本の貸し出し冊数が増えるなど、「図書委員だより」を通して、児童にとって本がもっと身近になった。「本を大切にする」という目標に対する働きかけが弱かったことが、今後の課題。

(ウ) 地域連携…佐賀市中部：大規模校

- ・平成18年にコミュニティスクールになって以来、地域の方々による読み聞かせやお話をしてもらっている。
- ・親子で一緒に一つの本を読む「親子読書」に取り組んでいる。読後、書いてもらった感想を掲示したり、図書館だよりに掲載したりして、地域や家庭に広げている。
- ・読み聞かせやお話は好評で、読書への興味関心は高まり、図書館を利用する児童が増えた。読み聞かせの団体の高齢化・人材不足が問題。地域の実態に合わせて、地域や家庭を巻き込んだ読書活動のアイデアを構想することが今後の課題。

(エ) 公共図書館…佐賀市北部：小規模校

- ・市立図書館から遠い佐賀市山間部に位置するため、児童全員に自分の貸出カードを持たせ、学校から担任引率で学校近くの市立図書館分館の利用を経験させた。
- ・全校児童へ佐賀市電子図書館システム利用の手引きを作成し、貸出・返却・電子書籍での読書の経験をさせ、自主的に分館を利用するきっかけづくりを行った。
- ・成果として、意欲的に分館を利用する児童が増えた。また、「本を読むことが好きではない」児童が0名になった。今後は、大人を巻き込んで読書の啓発活動を行っていきたい。

2 研究協議

Q 児童が、倉永小のマスコットキャラクターの「クラホン」を喋らせる機会はあるか。

A 「クラホン」は本の妖精であるため喋ることはない。入学式等の学校行事でクラホンが登場する際は、通訳を介してメッセージを伝えている。

Q 「子どもの読書の日集会」が新年度始めにあるが、準備や段取りはどのようにしているか。

A 前年度のうちに、集会で使用する標語の募集、審査、何をするか、台本なども作っていた。今年度に入ってから、劇や集会の練習を始めた。

Q 新聞の予算はどこから出ているか。

A 教育予算から出ている。朝日小学生新聞と地方紙を置いている。

Q アンケートの結果で「本を読むことが好きではない」と回答した児童が0名になったとのことだったが、本を読まない子へのアプローチはどうすればよいか。

A この結果になった直接的な理由は分からないが、これまでの様々な取り組みが結果に繋がったのではないかと。本校は過疎地にあり、児童は情報に触れる機会が少なく感じたため、地域の公共図書館に行くという実践に取り組んだ。夏休みに図書館を利用したり、保護者と図書館を利用したりする子どもが増えてきた。公立図書館のおすすめの本を選んでもらうなどの連携もできるようになってきた。保護者へのアンケートで、「お子さんは、読書をしている」という項目に肯定的に答えた回答の割合が低いことを問題視してきたが、まずは、子どもが本を好きになることで保護者にも本への関心を広めていきたい。

3 指導助言

大会主題にある「個別最適な学び」とは、子どもの特性や学習状況に応じて最も効果的な方法で学べるようにすることであり、学校図書館はその支えとして、個々に応じた資料提供、ICT環境の整備、探究活動の支援などが求められる。大牟田市立倉永小学校では、教育目標に基づき、学校図書館を読書・学習・情報センターとして活用し、クラホンファミリーや学校・家庭・地域の連携による児童主体の活動を展開している。佐賀市内小学校では、公共図書館との資源共有や教育目標に基づく図書館方針の策定により、教育活動と図書館運営を一体化させ、「図書委員だより」等、児童の主体的な取り組みが進められている。両事例の共通点として、①読書活動の意義共有と授業への位置づけ、②児童主体の運営体制、③利用者目線の蔵書選定とICT活用、④地域資料の保存による文化継承が挙げられる。今後、学校図書館には、学習者の興味や理解度に応じた蔵書構成、情報リテラシー教育の推進、個別・協働学習に対応した空間設計、教員・保護者・地域との連携による支援体制の確立が求められる。これからもすべての子どもが自分の可能性を発揮できるような図書館運営に期待したい。

B

[中学校] 図書館運営

[発表者 1]	宮崎県	宮崎市立佐土原中学校	教諭	菊地 明日香
[発表者 2]	佐賀県	吉野ヶ里町立三田川中学校	教諭	片江 生芽
[助言者]	佐賀県	多久市立図書館	館長	辻 成美
[司会]	佐賀県	唐津市立佐志中学校	教諭	前川 千夏
[記録]	佐賀県	唐津市立七山中学校	教諭	下尾 智美
	佐賀県	唐津市立北波多中学校	教諭	若林 匠
[会場責任者]	佐賀県	唐津市立西唐津中学校	教諭	宮原 典江

1 実践発表

(1) 発表1 「宮崎県の実践について」

① はじめに

宮崎県では、生涯読書活動の意義や人づくりの重要性を踏まえ、子どもから大人まで全ての県民が生涯にわたり読書に親しむ「読書県宮崎」を目指して読書環境の整備や読書振興に向けた施策を進めている。

② 学校司書と読書活動アシスタント

(ア) 小学校には学校司書が配置（図書館での授業支援や読書指導、図書館の管理）

(イ) 中学校の読書活動アシスタントは司書教諭及び学校図書館教育担当教諭（図書館の環境整備等）

各学校では図書主任と学校司書、読書活動アシスタントが協力し、読書活動の推進に取り組んでいる。図書館利用のオリエンテーション、ブックトーク、担任や養護教諭とのチームティーチング。終日の勤務ではないため日誌等で情報交換の仕方を工夫している。

③ 具体的な取組・内容

(ア) 家庭・地域・委員会活動の連携

- ・「家読（うちどく）の日」読んだ本を給食の時間に紹介。保護者の読んだ本の紹介。
- ・保護者による読み聞かせ

(イ) 地域

- ・公共図書館からの貸し出し
- ・地域ボランティアグループによる読み聞かせ

(ウ) 委員会

- ・生徒による読み聞かせ（小学生は高学年から低学年へ。小中一貫校では、中学生から小学生へ。）
- ・図書館祭り

(エ) その他

- ・各教科との連携「1 BAG・1 BOOK」（家庭科・美術科）

(オ) 「ひなた電子図書館」

- ・2020年9月より学校における読書活動や探究学習を支援するために運用されている。パソコン・タブレット、スマホ等を利用し、いつでもどこでも電子書籍を読むことができる。文字の拡大機能や読み上げ機能がある書籍等もある。

- ・電子書籍の活用

- ・国語や総合的な学習（調べ学習等）、朝読書

(カ) 学習情報センターとしての学校図書館

- ・テーマを決めた特設コーナーの設置
- ・机、書架の配置の工夫

④ 終わりに

〈成果〉宮崎県内の各支部でいろいろと工夫をして学校図書館運営を行ってきているが、研究することに意義を見いだせない方へ、それぞれの実践や研究をまとめ発表することで、その意義を伝えることができたのではないかと考える。それぞれの研究をまとめ、それを発表することができよかった。

〈課題〉宮崎県SLA各支部で素晴らしい取り組みがあるが、その研究が十分に周知されていないという課題がある。また、読書活動アシスタントがいない学校もあり、人材の確保が課題である。

- ・「ひなた電子図書館」は導入校が少ない。



(2) 発表2 「生徒主体の学校図書館づくりの取組について」

① はじめに

神埼地区は神崎市、吉野ヶ里町2市町の小学校9校、中学校5校の地区である。各中学校の「生徒主体の図書館づくり」から個別最適な学びにつながる学校図書館のあり方に迫っていききたい。

② 各学校図書館の実際

神埼地区の5つの中学校では蔵書冊の達成数やバーコード管理は共通している。公共図書館の利用は神崎市では可能だが、吉野ヶ里町では「ばけっと図書館」と自校だけの利用であり、格差がある。

③ 具体的な取組・内容

(ア) 学校図書館利用促進

- ・多読者の表彰、貸出クラスマッチ
- ・図書館だより

(イ) 貸出冊数増の取組

- ・毎月の読書統計データの活用・情報の共有
- ・広報部によるお勧め本の紹介

(ウ) 各学校の取組

- ・図書館祭り
- ・しおりコンクール、ポップ作成
- ・読書週間の最終日に全校読書会（年1回）



④ 終わりに

〈成果〉・研究によって各校の共通点・相違点が整理でき自校の特色が明確になった。生徒の学校図書館づくりへの企画意欲が高く、それを取り入れることで全体的な読書意欲の向上が期待される。

〈課題〉・生徒主体の図書館づくりには生徒会担当の職員との連携がさらに必要であること。また、地域の図書館との連携体制の構築と発展が必要である。

2 研究協議

Q 読書活動アシスタントの勤務状況はどのようになっているか。

A 年間〇時間というくり。本校は1日3時間。

Q 生徒主体の学校図書館づくりとは生徒会主体なのか。

A 図書委員会が主体の活動もあるが、生徒1人ひとりが読書活動、学校図書館の活動に参加したい、盛り上げたいという意欲も含め、生徒主体ととらえている。

Q 「ひなた電子図書館」を休み時間に読んでいるのが反省点に挙げてあるが、成功事例ではないか。

A 電子書籍を読んでいることを多くの教師が知らない。休み時間のタブレット利用の是非や、どんな縛りを設けるかなど実際紹介した学校を中心に発信し周知していきたい。

Q 高校では2,000冊を超えたら多いと思っているが、神埼中は貸出1万冊となっている。実際他校と比較して多いのか。

A 多い。読書冊数減っている中この数字は多い。

3 指導助言

公共図書館から本部会に参加したが、学びが多かった。宮崎の取組では、TTが印象的だった。「ひと」がきもになる。情報交換、コミュニケーションの大切さ。電子図書館を0から1にするのは大変だが、作ってよかったとなるのではなく、どう運営していくのが課題になる。

神埼の取組では子どもたちの参加型、自ら参加がよい。情報機器の整備で、自校のみではなく他校や公共、市販図書が活用でき、検索の範囲拡大で新しい本との出会いがある。公共図書館でも職場体験でポップ作成させたら、すごく動いたと実感があつた。子どもたち同士で勧め合うのは有効。自分が紹介したものが借りられるのはうれしいもの。長崎市立図書館勤務時代、館長「豊かな蔵書」、「整理された書架」、「知識豊富な図書館員」3つそろっていたら素晴らしい図書館だと思わないかと言われた。豊かな蔵書は冊数ではない。子どものニーズに合った選書は司書の腕の見せ所。整理させた書架は、サインが多すぎると伝わらない。伝えたいことはシンプルに正しい言葉で。資料管理も含め。「知識豊富な図書館員」は、図書館に携わる者すべて。常に変わり続ける社会で大人が情報のアンテナを常に高く持って、今子どもに何を伝えるべきかを大人も学び知っていかなければならない。読書バリアフリー「誰にでも等しく、情報が取れる」ことを図書館に携わる者が常に念頭に置くべき。個別最適な学びにおける個別を考えたとき、バリアをなくすことが必要。学校と地域の図書館の連携。ぜひ公共図書館を使ってほしい。目指すところは同じなので子どもたちのため一緒に活動していきたい。



C

【高等学校】 図書館運営

〔発表者1〕	沖縄県 沖縄県立小禄高等学校	教諭	平良裕美
〔発表者2〕	長崎県 鎮西学院高等学校	学校司書	今村節子
〔助言者〕	福岡県 久留米市立城島図書館	館長	原章
〔司会〕	佐賀県 佐賀県立鳥栖高等学校	教諭	高木晃代
〔記録〕	佐賀県 佐賀県立ろう学校	実習教師	笹部美佳
	佐賀県 佐賀県立金立特別支援学校	教諭	中山奈美
〔会場責任者〕	佐賀県 佐賀県立有田工業高等学校	教諭	堤明日香

1 実践発表

(1) 発表1 「『つながる』図書館～生徒の変容が生まれる場所づくり～」

① はじめに

本校生徒は文武両道を目指して日々努力しており、部活動加入率は80%を超える。こうした実態から、図書委員会活動の取り組みには工夫を凝らしている。

また、図書館を全ての生徒が安心して自分らしく過ごせる場所にしたいと考え、司書と司書教諭が協働し、特に力を入れているのが「生徒支援」である。

② 実践内容

本校では、「つながる」図書館をテーマに掲げ、以下の4つの観点から取り組んでいる。

(ア)「本」とつながる

部活生が多く、来館の機会が限られるため、本に触れる機会が増えるよう図書委員会活動を工夫した。

- ・「図書館だより」や「企画展」において図書委員の氏名入りで責任を持ってオススメ本を紹介する。
- ・巡回図書や大型書店での選書を図書委員が行う。

図書委員が本を紹介する機会を増やすことで意欲的に活動に取り組むようになり、貸出冊数も増えた。

(イ)「人」とつながる

図書委員活動では、学年やコースを超えてグループを編成する。自己紹介や役割分担を通じて協働的な姿勢が育まれ、委員会以外でも連絡を取り合うなど生徒間のコミュニケーションが増えた。

(ウ)「次」とつながる

図書館のイベントは、生徒主体となって活動する。企画書の作成、広報活動、片付けまでを担い、生徒は計画性と協働の重要性を痛感している。また活動後は必ず全体で振り返りを行い、情報共有を習慣化している。

(エ)「他」とつながる

各教科への授業支援、進路指導、生徒指導、環境保健などの他部署との連携、さらには、部活動の活動場所として提供するなど多様な連携と生徒の居場所づくりを行う。図書館が起点となり、他部署や部活動との橋渡しを担う場面もあった。

〈成果と課題〉

成果としては、読書への関心が高まり学びが深まったことに加え、生徒が主体的に活動へ関わることで対話力や課題発見力が育まれた。また、進路に対する意識にも変化が見られ、将来の職業について新たな展望を持つ生徒が増えた。さらに、自己肯定感が醸成され、学校生活に対する積極的な姿勢も育まれてきた。一方で、いずれの活動においても継続的な働きかけが欠かせない点は課題である。今後も多様な仕掛けを工夫しながら、図書館の可能性をさらに広げる運営を模索していきたい。



(2) 発表2 「学校司書にできることは…？」

① はじめに

学校図書館として「使える図書館」「つながる図書館」「寄り添う図書館」を意識して、より魅力的な図書館になればと試行錯誤している。

② 学校と司書について

本校は創立144年目のプロテスタント系ミッションスクールで、生徒数は876名である。司書は公共図書館で20数年、その後学校司書として10数年勤務後、2020年から鎮西学院高校で勤務。

③ 実践

「使える図書館」



読みたい、調べたい資料がすぐに見つかるように、動線を考えてレイアウトしたり表示を増やしたりリクエストサービスを充実させたりしている。

「つながる図書館」

利用者として生徒、教職員、保護者、運営として司書教諭、図書委員、司書、さらに書店や公共図書館ともつながって活動している。なかでも学校図書館を特色づけている図書委員の活動を大切にしている。

「寄り添う図書館」

学校図書館は公共図書館より利用者と司書の距離が近いと感じる。だが、本にも司書とのおしゃべりにも興味のない人はいる。そういう人や教室でゆっくりできない人にとっても居場所になればと考え、食事ができるスペースを作った。図書館はどんな人にとっても居心地の良い場所であってほしいと願っている。

図書館オリエンテーションでは、人の迷惑にならない限りどんなふうにも過ごしてもよい、本に興味がなくとも居ていい場所だと伝えている。

④ 終わりに 今後の目標

「使える図書館」選書のスキルを上げて、生徒に世界を知るためのたくさんの扉を用意したい。

「つながる図書館」司書教諭と連携を図りながら活用してもらえる方法を探し続けたい。

「寄り添う図書館」最も必要とされている役割。生徒の話を聴き、受け止めていきたい。

司書は常に図書館にいて、生徒が「調べたい」「話を聴いてほしい」時に思い出してもらえるような活動を続けていくために、これからも試行錯誤していく。

2 研究協議

Q 図書館が多様な居場所となっているのは、保健室のキャパシティがオーバーしているのか。

A 体調は関係なく、行く所がない生徒が「居場所」として利用する。

Q 大型書店で選書するとのことだが、どのようにやっているのか。

A 普段購入する書店に、図書委員や有志を数名連れて行って選ばせ、書店のカウンターに預ける。リスト化してもらい、確認後購入する。好きなように選ばせるが、責任を持って選んでくれている。

Q 「ココロクカフェ」の企画の予算はどうされているのか。

A PTA予算に、図書委員会に使える予算があり、予め「ココロクカフェ」や企画を計上している。

Q 教科との連携の構築は具体的にどのように行ったのか。

A 生徒の活躍の報告をきっかけに、多くの先生に積極的に何回も声をかけに行く。

3 指導助言

沖縄県立小禄高等学校 平良裕美先生、長崎県鎮西学院高等学校 今村節子先生ともに「つながる」をテーマにたくさんの実践を発表された。図書館教育を担う者として本とつながることはもとより、特に、人とつながることに重点を置いた実践であった。

「つながる」＝「連携」という考えに基づいて学校内と学校外と分けて考えることができる。

1 学校内

(1) 学校図書館の館長である校長先生の図書館教育に対する「思い・意気込み」で学校図書館を劇的に変容させることができる。

(2) 学校司書と司書教諭、図書館教育担当者の連携を中心に学級担任、教科担任等とつながることで学級指導、教科指導とともに「心の教育」まで深めることができる。

(3) 生徒たちとのつながりは「図書委員」、「本が好きで毎日のように来る生徒」、「居場所を求めて来る生徒」など。時には「第2の保健室」のような機能も発揮できる。

2 学校外

(1) 小禄高等学校の「対馬丸記念館」見学は、まさに高等学校の学習指導要領の最初に『学校図書館、地域の公共施設の利活用』、「……。また、地域の図書館や博物館、美術館……。」を実践している素晴らしい取組である。

(2) 高等学校ならではの感心をさせられたのは、地域の書店との連携。義務制の学校では考えられず、生徒が選んで、店員さんと協力し選書するところである。

(3) 公共図書館とは、「特貸」やインターンシップなどで「つながる」ようになっている。

このように学校図書館がその機能を生かしつつ、学校や地域の「ひと・もの・こと」と深くつながることで生徒たちの成長を促すことができると思う。



D

[小学校] 利用指導

[発表者 1]	宮崎県 日南市(共立ソリューションズ)	学校司書	多田 明子
[発表者 2]	佐賀県 伊万里市立南波多郷学館	教諭	原口 椋汰
[助言者]	熊本県 美里町立砥用小学校	校長	上塚 浩一郎
[司会]	佐賀県 唐津市立浜崎小学校	教諭	金丸 知恵
[記録]	佐賀県 玄海町立玄海みらい学園	教諭	古館 奈津子
	佐賀県 唐津市立外町小学校	教諭	田邊 由実
[会場責任者]	佐賀県 佐賀県立唐津東高等学校	教諭	松本 千春

1 実践発表

(1) 発表1 「『ひなたの学び』で育む『未来志向』型の読書活動実践」

～「多様な全ての子どものための、新しい扉となる」学校図書館づくりを目指して～

① はじめに

歴史と文化をもつ自然豊かな日南市において、学校図書館司書は週に一度、もしくは2週間に一度、司書4名で一人6校を担当して業務を行っている。司書不在時も図書館の機能を持続的に保持できる有機的な図書館づくりを目指している。

② 主題設定の理由

生きていることそのものに価値をおく「Well-being」を目指し、宮崎県教育委員会が推進する「ひなたの学び」における「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現するため、「ひとりひとりが問いをもち、なかまとなって学び合い、高め合う」場所としての学校図書館を目指し本主題の設定を行った。

③ 具体的取り組み

(ア) 空間をつくる

- ・配置、配架 → 館内動線の工夫
- ・蔵書資料の再構築 → 除籍、刷新(資料の循環)
- ・情報の精選と統制 → アートの力でいやしセンターとしての空間を創る

(イ) 時間をつくる

- ・図書館オリエンテーション
- ・ブックタイム
- ・1バッグ1ブック

(ウ) 仲間をつくる

- ・多様なニーズに応える(よみきかせ)(ブックトーク)
- ・インタラクション活動(アクティブラーニング)
- ・発達段階に応じた読書利用指導

④ 成果と課題

〈成果〉

- ・様々な方々とチーム編成しながら各校の図書館を「ユニバーサルな学びの場」としての空間に創り替えることができた。
- ・学校全体で取り組む「時間の共有化」と「ルーティーン化」は読書習慣の確立と読書活動推進につながった。
- ・自らの課題に向き合うとともに互いの個性を尊重する『未来志向』型の読書活動実践により、多様なニーズに応える『ひなたの学び』の“KEY STATION”創生活動が展開できた。

〈課題〉

- ・「読書の楽しさ」や「読書活動の面白さ」を体験していない子どもたちへのアプローチについて、更に研究と実践を重ねていく必要がある。
- ・各校の先生方との情報共有や、共通理解を行う場を増やしていく必要がある。



(2) 発表2 「主体的に学ぶ子どもを育てる学校図書館教育」～公共図書館との連携を通して～

① はじめに

伊万里市立南波多郷学館は1～6年生の前期課程と7～9年生の後期課程からなる義務教育学校である。学校には明るく落ち着いた学校図書館があり、図書だより発行など活発に取り組が行われている。また、伊万里市には学校図書館支援の充実を図るのに協力的な伊万里市民図書館があり、本研究においても公共図書館と連携した質の高い調べ学習を可能とする環境がある。

② 主題設定の理由

現代の生徒たちの調べ学習の主な媒体がインターネットになっていることを受け、そのメリット・デメリットを理解するとともに、本を利用した調べ学習の利点を理解し、これらを使い分ける力の育成を通して「児童の調べ学習の質の高まり」、「児童の主体性の向上」を目指し研究の主題を設定した。

③ 具体的取組

伊万里市民図書館及び伊万里市教育委員会が主催する「伊万里市民図書館・学校図書館を使った調べる学習コンクール」への取組を行った。「災害・防災」を大きなテーマとして提示し、児童の関心に合わせた個々のテーマ設定を行い調べ学習に取り組んだ。

(ア) 学校図書館の活用・司書教諭との連携

(イ) 公共図書館との連携

- ・調べ学習に関する出前講座
- ・書籍の貸出制度の活用

④ 成果と課題

〈成果〉

- ・公共図書館の資料の利用で多くの書籍に触れることができたことに加え、司書の方による選書により普段生徒が手に取ることができないような書籍を知るきっかけにもなり、児童の調べ学習の質が向上した。
- ・取組が進むと本やインターネットを調べたい内容に応じて使い分けながら調べる児童の姿が見られるようになり、情報に対する児童の主体的な姿勢が見られた。

〈課題〉

- ・本からの情報収集をする際、「どの本を読めばよいか」「本のどこに記してあるか」がわからず苦慮する児童が多く見られたため、情報収集力を向上させるために、図書館での資料の探し方、本の読み方の指導を継続していく必要がある。



2 研究協議

Q 学校図書館司書として学校の職員とどのように連携をとっているのか。

A 先生方からの相談や課題に応じて提案したり助言を行ったりして連携している。

Q ブックタイムの実施方法の具体的内容はどのようなものか。

A 紹介した小学校では毎週金曜日の朝15分を設定して実施している。勤務日であれば読み聞かせやブックトークを行うこともある。司書不在時はアウトプット読書として1分間でスピーチを行い、お互いに関心を言い合いディスカッションする場合もある。

Q 「調べる学習コンクール」の取り組みは4年生以外の学年でも行われているのか。

A 今年度は担当している4年生のみの実施だったが、来年度以降他学年にも広げていきたいと考えている。

Q 「調べる学習コンクール」はどれくらいの期間で取り組んだのか。

A 9月30日がコンクールの提出締め切りだったため、1学期5月中旬にはじめ、6・7月で活動を行い、8月に夏休みの宿題として家庭とも連携して体験活動や調べ学習などを行わせた。その後2学期はじめに完成させた。

3 指導助言

読書教育に携わる者として、最も大切なのは児童生徒をどのように育てていくか、子どもたちの学びをどのようにつくっていくかということである。多田先生は「共に学び合う子どもたち」を育てるために「個別最適な学び」「協働的な学び」の視点で活動が行われている。空間を整えるという考え方は学校に不足する捉え方であり大変参考になる。様々な活動においても何のためにしているのかという目的を忘れず、今までにもあった活動をどのように工夫していくのが大切である。原口先生は「主体的に学ぶ子どもたち」を育てるために、学校図書館や公共図書館を活用した実践が行われた。教師が単元の目標やゴールを先に提示し、テーマに合った本を用意するのではなく、児童が欲するテーマに合った本を探し、公共図書館を児童自らが利用することにつながるなど、情報に主体的に関わろうとする意識が育っていることが意義深い。お二人の実践から、「学級担任・司書・学校でのカリキュラム化」「体験的・探究的活動を通じた『使える力』としての定着」「『図書館＝学びの広がる場・知の拠点』という価値の児童生徒の実感」が重要となることがわかる。図書館が児童生徒の自ら喜んで向かう場所であるために、今後も環境づくりのアップデートを行い、電子図書への対応やデジタルとアナログを使い分けて利用するなど、それぞれの学校の実態に合った可能なやり方を探してほしい。



E

[中学校] 利用指導

[発表者 1]	大分県 豊後高田市立河内中学校	教 諭	田 中 智 也
[発表者 2]	佐賀県 白石町立白石中学校	教 諭	星 山 真 慶
[助 言 者]	佐賀県 伊万里市民図書館	統括管理者	鴻 上 哲 也
[司 会]	佐賀県 鹿島市立東部中学校	教 諭	中 西 久仁子
[記 録]	佐賀県 太良町立大浦中学校	教 諭	森 葵
	佐賀県 嬉野市立吉田中学校	教 諭	山 口 真莉子
[会場責任者]	佐賀県 太良町立多良中学校	教 諭	熊 本 日奈乃

1 実践発表

(1) 発表1 「魅力的な学校図書館づくり～本や図書館をもっと身近に～」

- ① 学校の紹介、生徒の実態
 - ・豊後高田市河内中学校は1年生6名、2年生3名、3年生5名の総勢14名の小規模校。
 - ・人と関わることが苦手な子が多く、学習に対しても抵抗がある子が多い。
- ② 学校での取り組み
 - ・アンケート結果として、読書に対して前向きに考えている生徒が多かった。
 - ・図書館は立地が悪く、利用している生徒がとても少ない。
→生徒が日常的に本に触れられる、本が身近にある、そのような中で本の魅力や世界が広がるように取り組みを充実させていこうと考えた。
- ③ 取組の実態
 - ・新入生へのオリエンテーション
 - ・朝読書
 - ・館内の整備
 - ・本の帯を使った掲示
 - ・デッドスペースの展示コーナー
 - ・リングの棚のコーナー
 - ・LLブック
 - ・先生のおすすめ本
 - ・ビブリオバトルについて
- ④ 終わりに
 - ・展示は好きなので、とても楽しんで取り組んだ。本研究大会の講演を聞いたり、様々な話をする中で、時間がとても必要だと感じている。たくさんの本や図書館に関わる上でのエネルギーをたくさん頂いたので、今後も頑張っていきたい。



(2) 発表2 「知的好奇心を育む図書館を目指して～読書・学校・情報センターとして～」

- ① はじめに
 - ・学校教育の中核たる役割を果たす場として、学校図書館を中心に様々な取り組みを通して、自ら学ぶ生徒、心豊かな生徒の育成に貢献できると考え、取り組み目標を「知的好奇心を育む図書館を目指した読書学習情報センターとして」と設定し、実践を行った。
- ② 本校の実態、図書館について
 - ・昨年度、町内の3中学校が統合してできた、開校して2年目の学校。
 - ・図書館も旧白石中学校の蔵書を中心に、2校の蔵書を受け入れたため、大幅に蔵書が増えた。
 - ・全校生徒は500人を超え、利用する生徒も多く、昼休みには賑わっている様子も見られる。
- ③ 実践内容
 - ・新入生オリエンテーション
 - ・読書センターとしての取組
 - 生徒が資料を探しやすくするため書架サインを設置。新刊は、図書館入口に新着図書コーナー、中央に新着文庫本コーナーを設置。図書館の外廊下にも新着図書壁掛けのコーナーがあり、外、入り口、中という設置を行うことで生徒の興味を持たせたまま館内へ誘導できるように工夫。
 - ・学習センターとしての取組
 - 授業への資料提供や教材研究のための資料の貸し出しを行っている。町内の小学校図書館や町立図書館からも借りることができ、授業で活用している。

- ・授業での活用の様子
- ・時事問題に関するコーナーの設置
- ・委員会としての取組
- ・朝読書

④ 終わりに

本校は統合を機に生徒にとって利用しやすい図書館環境づくり、そして本に親しむ環境づくりを目指してきた。さまざまな実践を通して図書館に親しみをもち、本や読書に興味を持つ生徒が増えつつある現状を大変嬉しく思っている。自ら学ぶ生徒、心豊かな生徒を育成するためにも教科学年関係なく学校全体となって取り組むことが重要だと考える。

多面的多角的に図書館や読書活動の活性化を進め、今後も生徒の知的好奇心を育む図書館を目指していきたいと考えている。



2 研究協議

Q 本を読まない子へのアプローチに悩んでいる。また様々な本を子どもたちに読んでもらうためのアプローチについて知りたい。

A 【田中】生徒からの「何これ？」を逃さないようにしている。例えば、本のアピールをして、本が子どもたちの目に留まることが、本との出会いのきっかけになる。表紙が素敵なものや子どもが食いつきそうなものをあえて置くことを意識している。

【星山】スマートフォンが普及したインターネット社会の中でも「10分間は本を読む」という朝読書の取り組みは、子どもたちにとって大事な時間だと考える。また、月水金をそれぞれ3学年貸出推奨の日と設定し、指定の日には積極的に本を借りるよう、委員会からも呼びかけを行っている。

Q 廊下の展示コーナーにおいて、利用状況を把握する際にはどのような方法で行っているか。小規模校ならではの選書の難しさや予算が余る羨ましさみたいなものがあると思うが、選書はどのようにされているか。

A 【田中】使用の状況については、教師に本を借りることを伝えさせるようにしている。選書については、生徒自身が読みたいものに合わせて購入。生徒の性格から処方箋のような感じで「あなたがこの本を」ということをやってみるのも面白そうだと感じた。また、本を廊下に出すという取り組みを大事にしたいと思いつつ、生徒指導上の問題もあると感じた。

3 指導助言

小規模校で特別支援に力を入れている河内中学校と、統合により大規模校となった白石中学校という、特色が大きく異なる2校の実践報告だったので、目的や活動ごとに整理した。共通して取り組まれていたことは①新入生オリエンテーション ②館内外の環境整備 ③朝読書 ④イベントの4つであり、両校ともこれにより、生徒の読書への垣根を下げ、本にふれるきっかけを増やしていた。特に河内中学校は、図書館が校舎内の不便な位置にあることを克服するためにアウトリーチのコーナーを設置したり、インクルーシブな書架をつくったりするなどの物理的な改善に担当者一人で取り組んでいた。また白石中学校は、前述の取組に加えて、⑤授業での図書館活用 ⑥委員会活動の活性化 ⑦地域ボランティアの活用 という多彩な活動を通して、生徒一人ひとりの読書意欲の醸成に寄与していた。両校が課題として挙げていたのは、生徒や教師の自主的なかわりをさらに促したいことと、イベントを開催した時だけの一過性の効果でなく、生徒や職員の継続的な図書館利用につなげたいという事だった。

まとめに代えて次の3点を述べた。一つは、魅力ある選書に注力すること。中学生は多様な価値観にふれて自らの人格を形成していく時期であり、さまざまな本を基に自分自身の視野を広げ、思考力や感受性を育むような読書体験が大切である。そのために必要な本を積極的に選書すべきである。二つには、生徒の興味関心や、動線を考えた本の見せ方や配置を創意工夫することである。求める本へと誘導するサインや、読書意欲を促すディスプレイ。思わず手に取りたくなるような書棚の構成。そこに生徒や他の教職員とのコミュニケーションが反映されれば相乗的な効果も期待できる。最後に、公共図書館や教育委員会とのネットワークを生かし、資料・施設・技術面のサポートを最大限活用することである。学校図書館は、生徒と本と人との時期限定の出会いの場である。



F

【高等学校】 利用指導

〔発表者 1〕	福岡県	福岡県立香椎高等学校	学校司書	関岡陽子
〔発表者 2〕	熊本県	熊本県立八代清流高等学校	教諭	野見山俊博
〔助言者〕	長崎県	長崎純心大学	非常勤講師	山本みづほ
〔司会〕	佐賀県	弘学館高等学校	教諭	松本美弥
〔記録〕	佐賀県	佐賀県立伊万里実業高等学校	教諭	岡本長子
	佐賀県	敬徳高等学校	教諭	川崎央理絵
〔会場責任者〕	佐賀県	佐賀県立伊万里実業高等学校	教諭	杵島真菜

1 実践発表

(1) 発表1 「図書館移転に伴う利用促進の取り組み」

① はじめに

大正10年に開校した本校は、普通科の他にファッションデザイン学科が各学年にあり、1,000人を超える生徒が在籍している。令和6年4月から新校舎での活動が始まった。1階の中央に位置する新図書館でどのような取り組みを行っているのか紹介していく。

② 取り組み内容

(ア) 排架の工夫

- (1) 生徒の動線を考えて類ごとに排架
- (2) 「新刊コーナー」や「映像化コーナー」の設置。

(イ) 企画「私の本棚」

(ウ) 企画 ブックカバーコンテスト

(エ) 部活動作品の展示

(オ) 掲示板の活用など

(カ) 教科・分掌との連携

- (1) 「小論文参考図書リスト」を発行。
- (2) 秋の芸術鑑賞の関連本をまとめたコーナーの作成。

③ まとめ

立地を最大限に生かし、排架の場所や展示内容、イベント企画まで多くの工夫を行った。図書委員による意欲的な活動はもちろん、文化部や教員とも連携することで、図書館全体を活性化させることができ、様々な場面において多くの生徒の利用が見られた。今回は「利用指導」というよりは「利用誘導」という思いで本校の毎日の活動を紹介した。各校の取り組みの参考にさせていただけるものがあれば嬉しい。



(2) 発表2 「学校図書館の現況『傍観者』から『当事者』へ 視点が変わって見えてきたこと」

① はじめに

図書を担当し「当事者」になった二年半の経験から、学校は大人の責任として学ぶ、読む機会（opportunity）を確保しなければいけないと考えている。知の「ファーストコンタクト」の最後の機会になるかもしれない高校生にどんな読書支援ができるのか、本校の活動を紹介する。

② 朝読書活動について

1. 概要

考査後の「期間限定」で実施。時間帯はSHR前の15分間。

2. ブックポートフォリオの活用

読書の記録を残すために、用意した様式に以下の内容を記入・保存。

- ・タイトル名 ・著者名 ・出版社名
- ・キーワード（心に残った表現や文など記入しておこう）
- ・この本を読んでの学びや気づきを書こう！

（今後の自分にどう活かせるのかをまとめてみよう）

③ 入口での展示の工夫

④ 文化祭での取り組み

- (ア) 読み聞かせ (イ) しおり作成



⑤ 取組の成果と課題

ほとんどの生徒は静かな環境に集中して読書をしている。各自記録したブックポートフォリオが貯まってくことで達成感が得られ、次の読書への動機づけにつながっていると評価している。また、図書館の貸出冊数の変化にも一定の効果を感じており、朝読書の活動が読書機会の創出につながっているといえる。積極的に読書をする層を、いかに拡大していくかが継続した課題と考えている。

⑥ おわりに

読書機会を確保することが、生きる力を身につけさせることにつながる。知る方法を知らないことが問題であり、物事を知る機会、結局は読書環境を用意しておくことが、学校では大事なのではないかと考える。

2 研究協議

Q ブックポートフォリオのカードは、一人ひとりが持っているものなのか、それとも図書館に置いていて、その場で書くものなのか。記入は生徒本人がするのか、委員会の方なのか。

A 生徒が持っている。総合的な探求の時間のファイルに綴じ込ませる。失くすのを少しでも防ぐために、こちらで穴あけまでして配布している。ファイルは一年生からずっと同じ。朝読書の時間に生徒が記入する。A5の横書きに、タイトル、著者名、出版社名の三つを書かせたうえで、心に残った言葉などを何か残してもらえれば、次も書いてくれるのではという期待をもって、まず何か書いてもらう。

Q 香椎高校の保健室の件について、養護の先生や生徒のリアクションがあれば教えてほしい。

A この試みは、福岡県立講倫館高校という総合学科の学校に赴任された方が、二年間かなり頑張ったことの試みの一つであった。本校は保健室から図書館に生徒を連れてきてもらうことが結構あったので、最初から保健室に置いてもいいのではないかという感じで始めた。手を動かす本を入れており、ある生徒が折り紙で作った季節のものが気に入り、保健室の入り口の掲示板にひまわりを飾ってあった。保健の先生に伺っていると、眺めるような本が多い。生徒が眺めてホッとするとする本を選ぼう、という感じで、今は選書をしている。

Q 香椎高校の図書館は素晴らしい位置だが、そこに作ってほしいという希望を出されたのか。

A 私は新校舎には関わっていないが、私の前任者は関わっている。しかし彼女自身からもそういう話は聞いておらず、まだ単純な設計段階で、廊下と廊下の間に図書館ができるという驚きの感想を聞き、蓋を開けてみたら最高級の立地であったので、福岡県の設計に感謝している。

3 指導助言

香椎高校の関岡司書は、正規採用のベテラン司書。生徒数1,218人という大規模校の新校舎1階新図書館での活動の発表だった。学校から新図書館の引越しは夏休みに行うと言われても、4月からの約4か月を空き室にするのはもったいないと、周りの協力を得て次々にイベントを仕掛けていくその様子は、学校司書としての蓄積された力があるからこそのものであった。図書委員有志の「私の本棚」、ガラス戸によって中が見えるので廊下を通る生徒へのアピール万全。開館後は、書道部・美術部の作品を館内に展示、新聞の書籍広告に色付けして掲示板に貼る、教科・分掌との連携として「小論文参考図書リスト」を毎年7月に発行（10月と1月に改訂版を出す）、秋の芸術鑑賞に合わせて関連本コーナーを作るなど、利用指導ならぬ利用誘導（ご本人のことは）の方法が素晴らしかった。保健室には、分館の役割を持つ本棚を用意し、養護教諭と話しながら9類は置かず、見ているだけでも楽しめる選書で生徒たちの心を癒す。正規司書がゼロの長崎県から見ると、ほんとうに羨ましい3S（専任・専門・正規）の学校司書の仕事だった。

八代清流高校の野見山先生は、教職37年目の地歴の大ベテラン教員。平成20年に司書教諭資格を取得しながら、生徒指導部所属が長く、図書館に携わって2年半というフレッシュマン。しかし、学校図書館は「初のファーストコンタクトの場所」であり、それを高校生になって初めて実感する生徒もいることから、何とか生徒に本を読む機会をと、考査後2週間限定15分間の全校での「朝の読書」を設定するところはさすがだ。「ブックポートフォリオ」を手書きで記入させ、それを各担任の面談指導時に活かしてもらっている。日常的に図書館と接するのは高校が最後という生徒が一定数いるにとらみ、彼らが本に触れる、本に接する、あるいは「本に出くわす」貴重な機会づくりに奔走されている。

今回のお二人のご発表に共通する「ベテランの力」は、参加された方々に「まだまだやれる！」という元気を届けたのではないかとと思われる。



G

[小学校] 読書指導

〔発表者 1〕	鹿児島県 霧島市立国分西小学校	教諭	下村 陽子
		学校司書	久保田 智子
〔発表者 2〕	佐賀県 嬉野市立塩田小学校	教諭	富 永 久 美
〔助言者〕	鹿児島県 鹿児島市立草牟田小学校	校長	加 峯 美由紀
〔司 会〕	佐賀県 神埼市立脊振小学校	教諭	田 川 桂
〔記 録〕	佐賀県 吉野ヶ里町立三田川小学校	教諭	河 内 美也子
	佐賀県 吉野ヶ里町立東脊振小学校	校長	鶴 田 剛 大
〔会場責任者〕	佐賀県 神埼市立西郷小学校	教諭	合 田 佳 織

1 実践発表

(1) 発表1 「読書指導のために利活用したくなる図書館を目指して」

① はじめに

本校では、読書指導の充実のために、学習センター、情報センター、読書センターとしての3つを考えながら、図書館づくりに努めている。

② 具体的な実践

(ア) 学習センターとしての図書館

- ・授業での図書館利用が分かりやすい「学校図書館メニュー表」の作成
- ・初任者教諭に向けての読書指導の研修

(イ) 情報センターとしての図書館

- ・図書館検索システム「カール」
- ・学校図書館を利活用した情報活用能力系統表

(ウ) 読書センターとしての図書館

- ・異学年児童や職場体験の中学生による読み聞かせ
- ・図書館館長である校長先生から目標達成者への表彰

(エ) 図書館がより身近になるための環境整備

- ・ボードゲームのゲストティーチャー
- ・図書館応援団による物語の世界の具体物の作品掲示

③ 成果と課題

〈成果〉

- ・読書量の増加
- ・家族読書の仕組みづくりができた。→「読み聞かせの輪」が広がってきた。

〈課題〉

- ・個人差の縮小（量と質）
- ・読書時間の確保→低学年のときから本に親しむ環境づくり、学校で読む時間を増やす等に取り組む。



(2) 発表2 「読書で心の栄養を～学校における読書指導の充実～」

① はじめに

本校では、20年以上前から朝読書を行っており、「読書で心の栄養を！」を目指した取り組みをしている。児童一人当たりの年間貸し出し数は、令和5年度で196.3冊、令和6年度で215.5冊と伸びている。

② 具体的な実践

(ア) 学年にあった本の選書

- ・教科書に紹介されている本を中心とした「学年おすすめの本（わくどきブック）30冊」の選定

(イ) 図書委員を主体としたイベント企画運営

- ・図書館祭り→年4回
- ・読書100冊達成者の校内放送や掲示物での紹介

(ウ) 「量と質の充実」を目指した指導

- ・低学年→1冊は絵本、もう1冊は図鑑や物語などの読み物。
- ・高学年→借りた冊数だけでなく、ページ数で目標を立てる。

③ 成果と課題



〈成果〉

- ・ 1人当たりの読書量が増えている。86.6%の児童が読書好きと回答。
- ・ 外遊びが好きな児童が多いが、イベントに参加する児童は98%とほとんどの児童が参加。

〈課題〉

- ・ 家庭での読書習慣の定着→学校・家庭・地域で連携して同じ取り組みをしたい。

2 研究協議

Q アニマシオンを図書館でする意義はなにか？

A 学習の段階において場所を変えている。導入のときは図書館、展開は教室、発表するときは図書館。

Q アニマシオンの世界に惹かれる工夫を図書室でしているのか？

A 作者の写真や、学校司書が作者の出身地で撮った写真などをパネルとして紹介したり、POPを書いたときは、図書館に展示したりした。

Q 青空文庫は活字だけであるが、児童は読むことに抵抗はないのか？

A 抵抗がない児童は、すらすら読んでいるが、学級文庫の絵本でもいいことを話している。

Q 高学年の読書ノートやPOP、帯の活動でどんな指導をしているのか？

A 読書ノート1冊が終わると、プラスで本を借りられるチケットを渡したり、よく書いているものを掲示したりしている。POPは、読んだ中から選書させ書かせている。書くことが難しい児童には、書きやすい本を紹介している。

Q デイジー図書や音声の本も読書は活用しているのか？

A 「りんごの棚」を活用して、点字の本や布絵本、リーディングトラッカー、マルチメディア図書は準備しているが、貸し出しになることは少ない。9月から多言語アプリ「レインボー」を取り入れており、外国籍の児童だけでなく、日本語も選択することができるため、文字を読むことが苦手な児童も文字を読まずに聞いて本を読むことができる。

A 学習用漫画や絵本、図鑑を読むことも読書だと認め、図鑑にはDVDが付いているので、教室で担任の許可のもと、DVDを見てもいいことにしている。

3 指導助言

国分西小学校では、図書館教育において3つの機能に基づいた計画的な指導が行われており、チーム体制のもと、低学年から読み聞かせを実施し、外部との連携も図りながら読書活動を推進している。読書力は「聞く力」から始まり、読み聞かせを通じて集中力やイメージ力が育ち、さらに分析力・比較力・批判力などが養われ、「楽しむ読み」や「調べる読み」へと発展していく。こうした読書の積み重ねが、豊かな人間性や情報活用力を育み、生きる力につながる。

塩田小学校では、校長先生が学校図書館長としての役割を認識し、学校全体で図書館の活用に取り組んでいる。朝読書やブックリストの完読、ジャンルを広げる読書など、量と質の両面にこだわった活動が発達段階に応じて展開されており、図書委員によるイベント企画など、子どもたちが主体的に読書に関わる姿が見られる。また、家庭での「家読」も重視されている。PTAによる読み聞かせも、読書力の育成に有効。読み聞かせは低学年だけでなく、すべての学年に効果があり、実際に高校野球部への読み聞かせの実話も紹介されている。塩田小では、教頭先生が司書教諭資格を持ち、図書館職員や事務補との連携により、しっかりとした体制が築かれている。

読書指導とは、読書活動の目的や課題を明確にし、それを通じて課題解決を図る指導である。読書は個の内に働きかける主体的な活動であり、全体への指導と個への寄り添いの両面が必要。教育課程との連携を意識し、学校計画を見直しながら、司書教諭や学校司書の役割を理解し、教職員全体で取り組むことが求められる。児童を取り巻く環境はデジタル化が進んでおり、アナログとデジタルの両方を活用しながら、教職員自身も学び続けてほしい。読書の蓄積によって子どもたちの生きる力を醸成していくことが大切だと思う。



H

[中学校] 読書指導

[発表者 1]	沖縄県	八重瀬町立東風平中学校	学校司書	眞座孝乃
[発表者 2]	佐賀県	唐津市立湊中学校	教諭	秋元美保
[助言者]	佐賀県	伊万里市立南波多郷学館	校長	多久島一仁
[司会]	佐賀県	唐津市立第五中学校	教諭	秋山いづみ
[記録]	佐賀県	唐津市立相知中学校	教諭	井上瑤
	佐賀県	唐津市立浜玉中学校	教諭	中島和哉
[会場責任者]	佐賀県	佐賀県立唐津東高等学校	教諭	原奈緒子

1 実践発表

(1) 発表1 「総合的な学習の時間や国語科と連携した読書指導」

① はじめに

前年度まで勤務していた具志頭中学校での実践を紹介する。

② 具体的な取組

(1) 総合的な学習における読書指導

- 平和学習での読み聞かせ会、関連する本の紹介・展示（読書月間・平和月間での取組）
- 平和教育への資料提供＜沖縄戦関連の写真や資料（パンフレット・新聞）の展示コーナー＞
授業での活用だけでなく、近隣保育園からの見学もあり学習センターとしての役割も担っている。
- 全学級を対象としたブックトーク（SDGsについて学びポスターを作成する授業にて）
- 地域資料を整理、蔵書化
- 特別支援学級での読書指導（知的学級や情緒学級でのお話会、りんごのたな）

(2) 国語科における読書指導に司書はどう関わるか

- 図書館オリエンテーション（図書館利用の説明・図書館クイズ・貸出）
- 俳句・短歌の授業への資料提供（必要冊数の準備・探し方の説明）
- POP作り（出来上がった作品は町立図書館で展示）
- 竹取物語の授業（様々なパターンの絵本を揃え、読み比べに生かす）
- 選書（国語の教科書に載っている話の原本）

③ 成果と課題

授業や読み聞かせを通して、紹介した本を手取る生徒が増えた。タブレットだけでなく、紙の資料を
探して図書館を利用する姿が見られるようになった。



(2) 発表2 「読書意欲の向上を目指した国語科における読書指導」

① はじめに

全校生徒41名の自然に囲まれた小規模校。昨年度まで唐津市の研究指定を受け、
主体的に学習に取り組む態度を育むための研究を行ってきた。

② 主題設定の理由

生徒の読書意欲が低いことを普段から感じていたため、読書に関するアンケートを実施したところ、約
6割の生徒が読書に対する意欲が低いことがわかった。そこで、国語科の授業において「本を読みたい」
と思わせるような指導の必要性を感じ、本主題を設定した。

③ 授業での取組

(1) POP作り

学校図書館で借りて読んだ本の中から、おすすめの本についてのPOP作りをさせ、クラスで交流さ
せた。作成したPOPは図書館付近の掲示板に貼り出し、本の紹介に活用した。

(2) シン十進分類表作り

貸出記録から生徒が学校図書館で借りる本にはジャンルに偏りがあることに気づいた。そこで、学校
図書館にはどのような本があるのか知らせるために、2年生の授業において「シン十進分類法」作りの
活動を行った。

④ 学校図書館との連携

学校図書館の本を学級文庫として各クラスへ貸出（選書は文化委員に任せ、主体性を持たせた）



⑤成果と課題

(1) 成果

事後アンケートの結果、「読書が好き」と答えた生徒の割合が増加した。また図書館利用の頻度が増えたことがわかった。

(2) 課題

貸出冊数に大きな変化があったわけではなく、国語の授業と日常の読書意欲とが結びついていない生徒もいた。限られた時間の中で、読書指導を効果的に行うことの難しさを感じた。

⑥おわりに

活字離れが叫ばれて久しいが、生徒たちには読書に没頭する楽しさを知ってもらいたい。そのために、国語の授業と学校図書館との連携がとても重要である。

2 研究協議

Q 各教科の年間指導計画と学校図書館の年間指導計画とで整合性が取れているか。

A 【真座】前任校では、学校図書館活用計画を教師とともに調整していた。現在は教科書変更に伴い、整合性は取れていない。今後やっていきたいという思いはある。【秋元】図書館の年間指導計画がない。小規模校のため、利用制限がほとんどなく、各教科担当で必要な時に適宜連携をとって活用している。

Q 図書館教育について小中連携ができていくかどうか。

A 【真座】小学校において、十進分類法については学年ごとにPPTで資料を作り、地区で共有。中学校でも同様のPPTを使って分類についての説明を丁寧に行う。【秋元】小中での連携はできていない。十進分類法については小学校の時に既習済みかもしれないが、実際に中学生に尋ねた際には、新鮮な反応を示した。

3 指導助言

「読書の範囲を広げること」「学校図書館を活用して、生徒の主体的・対話的で深い学びを支えること」2名の発表はそれを目指していた。真座先生は、学校司書と教員との連携ができていく点が本当に素晴らしい。廊下にも本や資料の展示を行っており、生徒たちが身近に本を感じることができる。平和学習にも力を入れてあり、生徒たちの平和への意識を高められるようにされている。昨日の講演の中でも、「住むところは思考に影響される。」とあった。九州では平和教育に力を入れているが、関東ではあまりそうではないところもある。地域資料を整備し、生徒に提供されていることは、大変ありがたいこと。公共図書館には、とても貴重な地域の記録が残されている。(製本されていないものも含めて)積極的に活用してほしい。特別支援学級に向けての読書指導にも力を入れてある。「りんごのたな」に見られるように、特別な配慮を要する方にも安心して読書をしてもらうという意味でも、今日の学校図書館の役割はとても大きい。

秋元先生はしっかりと生徒の実態を把握した上で、読書意欲の向上を目指された。生徒の言葉をもとに、POP作りという活動をされ、実際に成果を上げられた。「シン十進分類法」の「シン」には様々な意味を読み取ることができる。「4類にはこんな本があるのか」と改めて知った生徒がいて、読書の幅や視野が広がったのではないかと。学級文庫の選書を文化委員(生徒)にさせることで主体性を育むことにもつながっただろう。スマホは我々の時間を奪うこと。「スマホから読書へ」を合言葉にしたい。昨日の基調提案で「1人1人が移動図書館である」という考え方が出たが、2名の先生方はまさに「移動図書館」だと感じた。「読書」は私たちの心を落ち着かせ、あらゆる学習の基礎をつくることで、私たちを育て、平和をもたらしてくれるものだと思う。私自身、これから子どもたちにも「本が好き」と思ってもらえるような教育をしていけたらと思う。



I

【高等学校】 読書指導

【発表者1】	大分県	大分県立大分豊府高等学校	教諭	阿南嘉恵
			学校司書	阿野卓也
【発表者2】	佐賀県	佐賀県立佐賀商業高等学校	教諭	式町都茂子
	佐賀県	佐賀県立佐賀西高等学校	教諭	野田香奈子
【助言者】	大分県	大分大学教育学部	教授	花坂歩
【司会】	佐賀県	佐賀県立佐賀農業高等学校	講師	古家義識
【記録】	佐賀県	佐賀県立神埼清明高等学校	教諭	堀田勇人
	佐賀県	佐賀県立致遠館高等学校	教諭	野副祐未
【会場責任者】	佐賀県	佐賀県立有田工業高等学校	教諭	堤明日香

1 実践発表

(1) 発表1 「そうだ図書館、行こう。」

① 共同研究主題設定の理由

本県の図書館担当職の事情が関係する。学校司書が単年度で入れ替わり司書教諭も他の校務分掌と兼務であるため、2～3年先を見据えた運営や指導が難しい。学校司書の役割が本と生徒を結びつけることであるならば、司書教諭の役割は学校図書館に生徒を結びつけることであり、学校図書館は、在学する生徒に最適化された図書が学校司書によって選書されているところだと考えた。



② 大分豊府高校の取組

(ア) なぜ本を読まなくなるのか

一般に言われる「生徒の多忙化」「コンテンツの多様化」等は本校にも当てはまるが、一方で小中学生の読書数は伸びている。「本を読みたい気持ちはあるが、読めない」という生徒に働きかける実践を行った。

(イ) 読書生活充実のために

基本的な考えとして大事にしたかったのは、強制はしないということである。「読書が嫌いな子」「図書館が嫌いな子」を作りたくないと考えた。本校の「読書習慣調査」を分析し、指導に活用した。

(ウ) 「読書指導」の先行実践

実践例：「大村はま『読書生活指導』」「帝京八王子中学校高等学校」「盈進中学高等学校」

(エ) 本校の「読書指導」実践

教育課程や年間指導計画の中でどう位置づけていくかが読書指導の課題となる。学校設定科目の活用が必要だと感じている。実際の実践としては①「新書マップ」を活用した。②国語の授業で「小読書」を取り入れ、メタモジを用いて読書記録を取らせた。

(オ) 学校司書による読書指導

1・2年生「ミニビブリオバトル」：図書委員が進行し、発表は台本を用いることも可としている。生徒が選んだ本を見ると、ノンフィクションも混じっている。

図書館オリエンテーション：生徒が司書に頼らず一人で図書館を活用して情報を手繰り寄せるのが目標。NDC検索等手立てを示す。

本誌では発表内容の要旨のみ掲載しています。大分県各校の取組については大会冊子並びに配布の資料のみの提示となることをご了承下さい。

(2) 発表2 「これからの学校図書館をデザインする～学校や生徒の個性に応じた利用者増への取組～」

① はじめに

高校生の読書離れが言われて久しく、学校図書館の貸出冊数も減少傾向にある。理由に「読む時間がない」「学校の図書館で借りるのが面倒」が挙げられる。そこで、生徒の利用しやすさの観点から学校図書館の運営改善を行って、利用率の向上から読書機会を増やすことにつなげる取組を行った。

② 実践方法の検討

県内図書主任へのアンケートを分析し、特色ある取組を行っている学校や貸出冊数の多い学校に取材した。すると、「生徒主体での図書館だよりの作成」「学級文庫の活性化」「配架の工夫」で増加傾向が見られた。そこで、担当5校の実情に合わせて図書館利用者増の取組を行った。



③ 実践

「レイアウト・展示」

生徒の動線に様々な本が目に入るような陳列の工夫、くつろげるスペースの設置、POPや表紙の見え平積みなど生徒が選書しやすくする工夫などを行った。

「図書館だより」

「特別号」で図書委員が内容を検討する。生徒に読んでほしい図書の情報を提供する。情報量を精査する。

「選書」

岩波ブックレットをまとめて購入した。薄さが生徒の抵抗感を下げたと思われる。

「その他」

授業や面談を図書館で行い、来館の機会を作った。

④ 実践の効果

生徒は、表紙が見えるようにした図書や生徒手作りのPOPに取り上げられた本には興味を示し、貸出もあった。また授業等来館の機会を作った時には、図書を手に取る様子も見られた。

⑤ おわりに

貸出冊数の増加という目に見える効果は、残念ながらはっきりとは言いがたい。しかし、来館の時間と機会があれば、本を借りていく様子がうかがえた。生徒同士の口コミの威力は大きかった。また、生徒との対面の大切さも感じられた。今後は、来館の機会を意図的に増やすこと、利用しやすい環境を整えることを考え、図書館利用への改善を重ねていきたい。

2 研究協議

Q 「e-slip」とはどのようなものか。

A 図書の検索システムで、他校と共有できるため貸借の連携ができる。ただし逐次更新の手間がある。

Q 「くつろぎスペース」で好ましくない利用態度があった場合、どのように対応しているか。

A 概ね良好な態度で利用している。周囲の状況次第で声をかけたりそっとしておいたりしている。

Q 生徒の動線に合わせた配架の工夫はどのようにしているか。また平積みのほうが手に取りやすいのか。

A 生徒の目に付きやすい配架にした上で、声かけをして薦めている。また、読書が苦手な生徒が選ぶ際には、表紙で選ぶ傾向がある。さらに生徒同士の情報交換が有効だ。

Q 各県の予算の状況はどのようなになっているか。

A 一律にベースの予算が決まっている県もあれば、生徒数基準に決まっている県もある。

3 指導助言

この部会では「読書指導」がテーマであった。読書教育を学び手の目線で捉え直すと「読書学習」、それを指導者目線で考えると「読書指導」という言い方になる。指導（学習）内容は、出会い方、読み方、伝え方に大別され、産物として、学習者は「読書経験」を得る。指導者は、読書が偏らないように「選書」を工夫したり、ビブリオバトルのような「イベント実施」や「声かけ」による促しをしたり、空間美化や配架、ポップの工夫といった「環境整備」、「通信の発行」、「地域との連携」に努めたりすることが求められる。近年、特に重要なのが「読書時間の確保」である。今の子どもたちは多忙ゆえに、大人が率先して、朝読書や帯単元としての読書時間を設けなければならない。

今回の実践発表を振り返ると、上述のいくつかを、各校の実態に合わせて組み合わせていたことが確認できた。理想はすべての指導を実行することであるが、現実的には難しいことと思う。学校司書の配置が不安定であったり、図書館担当者が兼務で多忙であったりといった現実的な課題も報告された。可能な取り組みを選び、少しずつ積み重ね続けることが重要であろう。大切なのは継続である。

最後に、図書館に「大人向けの絵本」を置くことをお勧めした。近年、戦争や差別、貧困、ジェンダーなどをテーマにした絵本が多く出版されている。よくできた絵本は短いながらも深い学びをもたらすので、多忙が原因で本に手を伸ばせない子どもにも積極的に勧めていただきたい。ゆくゆくは、心に響く一冊と出会わせたいものである。それがどんなジャンルの、どんな本なのかは、私たちにはもちろん、本人にすらわからない。だからこそ、多読が必要なのである。絵本という入り口を用意することで、普段、読書をしないような子どもでも、読書に浸る喜び、読書後に味わえる充実感に出会いやすくなるはずである。そうしたコーディネートが大人に求められているように思う。



J

【小学校】 学校司書・司書 教諭との協働

【発表者1】	長崎県 時津町立時津北小学校	教諭	森山友子
		学校司書	田平理栄
【発表者2】	佐賀県 鳥栖市立若葉小学校	教諭	小野華恋
【助言者】	佐賀県 嬉野市立塩田小学校	校長	川原俊彦
【司会】	佐賀県 鳥栖市立弥生が丘小学校	教諭	永松笑美
【記録】	佐賀県 鳥栖市立鳥栖小学校	教諭	松永留美子
	佐賀県 鳥栖市立鳥栖北小学校	教諭	今里裕美
【会場責任者】	佐賀県 鳥栖市立田代小学校	教諭	小野和奏

1 実践発表

(1) 発表1 『司書教諭と学校司書との連携・協働』

① はじめに

時津北小学校は児童数485名（通常学級15、特別支援学級6、通級指導教室1）であり、この10年で児童数が約2倍に増加した。本学校には現在2つの図書室があり、2つの図書室の蔵書数は約10,500冊である。

② 具体的な実践

ア. 読書感想文の授業

児童の書く意欲を引き出すために、「読書感想文の書き方」の授業を実施。

イ. ブックトーク

日常に広がる読書体験について話し合う。

ウ. 国語科研究授業

学級担任と司書教諭・学校司書が連携し、本と親しむきっかけをつくる。

エ. 日常のかかわり

外部・地域連携による図書館活動

(1) 外部連携

- ・本の選書
- ・書館の蔵書が足りない場合は、時津町立図書館や長崎県立図書館から借入れ

(2) 地域連携

- ・シニアクラブによる「読み聞かせ隊」
- ・保護者による図書ボランティア「ブックロウ」

③ 成果

読書感想文の書き方の指導で司書教諭がモデルを示したり、2つの感想文の違いを見つける活動を行ったりすることで、読書感想文へのハードルが下がり、書くことへの意欲につながることができた。

ブックトークを行うことで、児童から読書に対する前向きな声が多数上がり、その後、紹介した本を求めて図書館を訪れる児童の姿が見られ、読書意欲を高めることができた。

国語科研究授業では、学習者モデルを提示することで、児童は自分が読みたい本を自分のペースでじっくり選ぶことができた。低学年でも読書を「楽しい」と感じるきっかけに繋がった。



(2) 発表2 『児童と本を繋ぐ、学校図書館と教員を繋ぐ～豊かな心を育む読書活動を学校全体で支えるために～』

① はじめに

若葉小学校は児童数344名の計21学級からなる中規模校である。令和4年度に、佐賀県教育委員会より「1人1台端末を活用した授業改善研究指定」を受け、令和5年度までの2年間授業実践や研究を行ってきた。

② 主題設定の理由

研究指定を受け、1人1台端末を活用した授業研究を行ってきたことで、児童も教職員もタブレットを活用する機会が増え、本を利用することが減っている。

そこで、司書教諭としての役割を探索し学校司書と協力することで、児童と本、学校図書館と教員を繋ぎ、さらに読書活動を充実させることができるであろうと考え、本研究主題を設定した。

③ 具体的な実践内容

- (ア) 図書委員会の企画と運営
- (イ) 地域・家庭との連携
- (ウ) 司書教諭と学校司書による取り組み
- (エ) 計画の策定
- (オ) 選書
- (カ) 学習での図書使用をコーディネート

④ 成果と課題

貸し出し冊数がすべてではないが、学校司書は日頃から児童の読書活動を支えていることもあり、令和4年度から6年度の児童数、貸し出し冊数、一人当たりの貸し出し冊数を見てみると、児童数は減ったが、貸し出し冊数は増えた。これは司書教諭と学校司書で協働することができたため、児童が本に出会う機会が増えたことが要因だと考える。

一方で、学校図書館と教員を繋ぐことは難しかった。担任をもっていると、生徒指導や保護者対応などに追われ、学校司書との打ち合わせをする時間を十分にとることが難しいからだと考ええる。

2 研究協議

Q 図書ボランティアがいる経緯は。

A コミュニティスクールの一環で、読み聞かせ隊の人から広がり、毎年年度初めに募集をかけて参加者を募っている。

Q 第2図書館はどのように設置され、運営されているのか。

A 第1図書館と高学年の教室が遠いため、近くに設置した。運営については、ICT担当に相談し、技術的には可能であった。しかし、見守りの人が課題となり、教育委員会に相談し、昼休みには支援員を配置し、運営をしている。

Q 個別最適化された学びへの取り組みがあれば。

A 第2図書館の運営を今後も持続できるように、管理職や町立図書館とも連携していくこと。

Q 雨の日の読み聞かせの準備期間、頻度、どのような工夫をされているか。

A 図書委員会の活動として実施している。児童の提案をもとに実施。曜日ごとの常時活動の際に準備を行っている。委員会の児童が1～3年生にインタビューを行ったり、学校司書に聞いたりし、選書までしている。昼休みの時間内に読み聞かせられる本を選ぶようにも工夫している。

Q 個別最適化された学びへの取り組みがあれば。

A 児童が調べ学習をする際、「本」が選択肢の一つになるように、関連する本を準備している。

3 指導助言

学校司書は情報のプロであり、児童生徒や教員への資料・情報提供の専門職である。授業支援者と言える。また、司書教諭は、教育・授業のプロであり、教育課程全般に関わる教諭であり、コーディネーターである。学校図書館活用推進の専門家と言える。協働とは、協力して働くことを意味し、学校図書館においては、学校司書と司書教諭が両輪となることをイメージしながら運営に当たることが大切だと考える。

学校図書館は、児童生徒の読書活動や児童生徒への読書指導の場である「読書センター」、児童生徒の学習活動を支援したり、授業の内容を豊かにしてその理解を深めたりする「学習センター」、児童生徒や教職員の情報ニーズに対応したり、児童生徒の情報の収集・選択・活用能力を育成したりする「情報センター」としての機能を有する。今回の2校の発表事例については、それぞれ3つの機能を生かした実践が報告された。正に学校司書と司書教諭が両輪として関わっていた事例と言える。学校司書と司書教諭が両輪として関わる際に重要なのがコミュニケーションとなる。また、管理職、担任等も加えた学校図書館の運営に関わる全ての関係者とのコミュニケーションも欠かせない。

これからの協働を考えたときに、重要となるのが情報活用能力やICT機器の活用である。これからは、学校図書館の運営に関わる関係者の中にICT担当支援員等を加え、協働の質を上げることが必要と考える。今回の大会テーマにもある「個別最適化」を推進するにはICTの活用は欠かせない。

一方で、協働を推し進める際に重要なのがコミュニケーションの時間の確保である。協働の質の更に向させるには時間の確保は必須である。また、学校司書、司書教諭の資質を向上させる研修の場の確保も必要である。時代の流れも踏まえながら学び続ける学校司書、司書教諭でありたい。



K

〔中学校〕 学校司書・司書 教諭との協働

〔発表者 1〕	熊本県 八代郡水川町立竜北中学校	教諭	木原 まゆみ
		学校司書	本田 道代
〔発表者 2〕	佐賀県 多久市立東原庫舎西溪校	教諭	樋口 賢太
		学校司書	古賀 麻理子
〔助言者〕	宮崎県 教育庁義務教育課	指導主事	吉田 健太郎
〔司会〕	佐賀県 多久市立東原庫舎東部校	教諭	栗丸 奈央子
〔記録〕	佐賀県 多久市立東原庫舎西溪校	教諭	坂本 つやみ
	佐賀県 小城市立小中一貫校芦刈観瀾校	教諭	阪口 真悟
〔会場責任者〕	佐賀県 小城市立小城中学校	教諭	井上 華花

1 実践発表

(1) 発表1 「『夢』の実現へ向けた主体的な学びのための図書館活用～学校司書との連携を通して～」

① はじめに

水川町には、小学校3校、中学校2校の5校があり、各学校に学校図書が配置されている。図書館は教室棟から離れているが、学校司書は1日7時間の会計年度職員であり、生徒は常に図書館を利用できる。日頃から、司書教諭と連携しながら、日々児童生徒の学力向上や読書意欲の向上に取り組んでいる。

② 取り組みの概要

(ア) 読書に関わる取り組み

- ・年度当初に目標冊数の設定
- ・ブックリスト発行
- ・先生方による読み聞かせ
- ・Myしおりコンクール
- ・POP作り
- ・動画によるおすすめの本の紹介



(イ) 調べ学習に関する取り組み

- ・公共図書館との連携
- ・調べ学習の本コーナー設置
- ・国語科、技術科、社会科、理科での図書館と連携した授業の実施

③ 成果と課題

〈成果〉・(読書・調べ) 学校司書と司書教諭の連携で、生徒の読書や学習環境の充実を図ることができた。

- ・(調べ) タブレットパソコンとの併用ができた。公共図書館との連携を図ることができた。

〈課題〉・(読書) 読書量の減少や質の低下。

- ・(調べ) インターネット(新鮮な情報)と図書館資料(普遍的な内容)の棲み分け。

④ おわりに

学校図書館は、児童生徒にとっての読書活動、学習の場であり、大きな役目を担っている。これからも学校司書との教師の連携、ICTや公共図書館の活用などを生かし、児童生徒の学びを支えたい。

(2) 発表2 「本に慣れ親しむ児童生徒の育成～義務教育学校の特長を生かした学校図書館司書との連携～」

① はじめに

多久市では、平成29年度に全ての学校が義務教育学校になり、それまで10校あった小・中学校が3校に再編された。1年生から9年生が一つの学校でともに学校生活を送っており、学校図書館は1～6年生用の前期課程図書館と、7～9年生用の後期課程図書館の2つがある。

② 研究の目標

義務教育学校の特徴を生かして、図書館教育主任を中心とした教員・学校図書館司書との連携を強化することで、本に興味・関心をもち、主体的に読書に取り組む児童生徒の育成を図る。

③ 研究の実践

(ア) 授業での活用

- ・年度当初の全学級での図書館の利用に関するオリエンテーション
- ・辞書を使った国語科の学習
- ・総合的な学習の時間の調べ学習
- ・読書感想文の指導

(イ) 委員会活動

- ・6月と2月の図書館まつり(しおり作り・おすすめの本の紹介・1～6年生対象の後期課程図書館見学ツアー)

(ウ) 新刊の選書

④ 成果と課題

〈成果〉

- ・年度当初のオリエンテーションで、児童生徒の図書館への興味・関心を高めた。
- ・授業で本に触れる機会を作ることで、児童生徒が本に親しむようになり、身近な場所になっている。
- ・委員会活動で縦のつながりが生まれた。
- ・教員が選書に関わることで、学校全体で図書館を活用する意欲が高まった。

〈課題〉

- ・国語科と総合的な学習の時間以外の教科での図書館の活用。
- ・規模の大きい学校での教員間や学校図書館司書との連携。

⑤ おわりに

今後も取り組みを継続し、教員と学校図書館司書との連携の強化により、「本に慣れ親しむ児童生徒」の育成」に力を入れていきたい。

2 研究協議

Q 図書館を授業で活用するために、他の職員にどのような働きかけを行っているか。

また、これからどのような働きかけを行っていききたいか。

A (発表①竜北中) 年度初めの職員会議の際、職員に図書館の利用を呼びかける。しかし、図書館を活用せず、タブレットでの調べ学習が増えている現状がある。読み聞かせを他の職員を巻き込んで行っている。年度途中にも声掛けをしているが、他の授業での活用は少ない。

(発表②西溪校) 職員会議を図書館で行う。図書の利用にかかわらず、図書館で授業をしてもらう。

Q (発表②) について、多久の3校は義務教育学校だが、前期課程と後期課程で図書館が分かれている学校とそうでない学校がある。それぞれのメリットとデメリットは何か。

A それぞれに良い点がある。前期課程と後期課程の図書館が同じ学校は、縦での交流が生まれやすいというメリットがあり、分かれている学校は後期課程の生徒がより学習に集中して取り組めるというメリットがある。

3 指導助言

竜北中学校の実践発表は、各教科の学習指導を学校司書と連携して実施したところに価値がある。各教科の授業に図書館の専門家である学校司書のプログラムを取り入れることで、「教材から学ぶ」とどまらない深い学びにつながっている。また、担当教員自身の教材研究等の負担が軽減され、より質の高い授業をデザインする時間の確保につながったといえる。

東原摩舎西溪校の実践発表は、義務教育学校の特長並びに公共図書館との連携を生かした学校図書館の機能の充実を図ったところに価値がある。学校図書館が「読書教育」を推進することで、教員の指導の幅が広がり、委員会活動等にもよい影響を与えている。また、公共図書館からの図書セット貸出は、新たな本との出会いを創出する機会にもなっている。

2つの学校の実践から、学校管理職をはじめとした学校全体の理解と支援のもと、学校司書・司書教諭との協働によって、学校図書館を有効活用した学校教育の充実を図る共通のポイントがあると考えられる。

○学校司書と司書教諭が授業内容や生徒の実態等を共有することで、個別最適化された学びの提供に繋がること

○司書教諭を含む学校の教員と学校司書のお互いの得意分野を活かし、専門性を尊重することで、教育活動全体の充実が図られ、より質の高い指導が実現できること

○司書教諭を含む学校の教員と学校司書それぞれが積極的にアイデアを出し、連携することで、学校図書館の活用が促進され、担当教員の負担軽減にも繋がること

○学校図書館が学校教育にどう貢献するかを共有することで、学校教育目標の達成につながる

発表には、各学校で実践しやすいもの、実際に他の学校でも実践しているものがあつた。

そのような取組は、今後どの学校においても、視点を変えて実践することで、新たな教育的価値を見いだすことにつながると考えられる。これらのことから、2校の実践発表は非常に価値あるものであつたといえる。



L

【高等学校】 学校司書・司書 教諭との協働

【発表者1】	鹿児島県	鹿児島県立開陽高等学校	専門員	大西飛鳥
【発表者2】	佐賀県	佐賀県立高志館高等学校	教諭	瀬口鈴香
	佐賀県	龍谷高等学校	学校司書	香月浩子
【助言者】	佐賀県	佐賀県立武雄高等学校	校長	岡祐一郎
【司会】	佐賀県	佐賀女子高等学校	教諭	金崎直幸
【記録】	佐賀県	佐賀清和高等学校	教諭	重松享子
	佐賀県	佐賀県立白石高等学校	教諭	秀島絵里
【会場責任者】	佐賀県	佐賀県立伊万里実業高等学校	教諭	杵島真菜

1 実践発表

(1) 発表1 読むより先に“出会う”図書館へ～多様な学びに寄り添う協働のあり方とデジタルの活用～

① 主題設定の理由

本校は、全日制・定時制・通信制の三課程を有する、県内唯一の単位制高等学校である。図書館利用者には、年齢層も幅広く多様な背景をもつ生徒が多いため、「寄り添うこと」を基盤に、それを「支援」として具体化することを目的とし、司書教諭と協働して体制の整備を進めてきた。学校図書館が「個別最適な学び」に対しどのように向き合い、何を担えるのかを探ることがこの主題設定の理由である。

② 研究の実際

1. 司書教諭との協働

- (ア) 校務分掌に「読書指導係」を新設
- (イ) 読書行事の設定
- (ウ) 必読書の設定と教員による推薦図書の紹介

2. デジタルの活用

- (ア) 広報のデジタル化
- (イ) 蔵書検索のデジタル化
- (ウ) 利用案内のデジタル化

3. 館内の整備と図書館イベント

- (ア) 読書バリアフリーの推進
- (イ) 別置による課題解決支援
- (ウ) 月替わり展示とイベントの実施



③ 成果と課題

不読率調査における該当率は減少しているが、貸出冊数は増えないという現状がある。生徒には図書館という場の認知を促す活動を行ってきたため、「学びの場」としての認識が十分ではない。教職員も同様であり、支援の視点が共有されていない現状を踏まえ、教職員向けの広報を発行し、周知に努めている。

④ おわりに

多様な背景を持つ生徒には、まず図書館という場と出合わせ、その機能と司書の役割を理解させることが重要だ。司書は「人を好きであること」が大切であり、人のために何ができるのかを考え続けていくことが必要なのではないかと思っている。図書館を安心できる居場所として整え、生徒に寄り添いながら、読書が生きる力を育む手段となるよう支援していきたい。

(2) 発表2 「生徒一人一人に適した学びを提案する学校図書館づくり」

① はじめに

県立、私立ともに様々な制約の中で教員・司書が協働し「生徒一人一人に適した学びを提案する学校図書館づくり」に取り組んでいる。

② 県内各校の取組事例

1. 佐賀県立高志館高等学校

SNS等を用いた広報活動。来館者数クラスマッチ。文化祭での出展。

2. 佐賀県立嬉野高等学校塩田校舎

新刊のPOP掲示。図書館活動に興味のある生徒の選出。学級文庫の設置。

3. 佐賀県立厳木高等学校

リーディングルーラー、ポイントカードの導入。障害関係図書の別置。

4. 佐賀県立神埼清明高等学校



生徒個人が学習用端末で利用できる配架位置の検索システムの導入。

5. 佐賀県立小城高等学校

図書館の情報をClassiにて全生徒に配信。クラス読書会、百人一首大会の実施。飲食スペースの設置。

③ 佐賀龍谷学園龍谷高等学校の取り組みについて

- (ア) 図書便りの発行 (イ) 季節や時事に合わせた展示 (ウ) 移動図書館
(エ) 朝HRの図書室での実施 (オ) 電子書籍の導入 (カ) 授業による電子書籍の活用
(キ) iPadによるPOP作成 (ク) 文化祭時のPPTによる図書紹介 (ケ) 保育部とのコラボ

〔まとめ〕『来てもらう図書館』から『一歩近づき寄り添える図書館』へ向上させたいとの思いから、電子書籍の活用を試みた。読書のきっかけづくりとして手軽な電子書籍を利用するとともに、物足りなさを感じた生徒が紙媒体の図書を求め図書館へ来ることで、本との橋渡しを司書ができればと考える。

④ 今後に向けて

司書研修会の折に行ったアンケートでは、生徒が求めているものを知りサポートしたいという意見が多く見られた。今後も、図書館担当教員と司書との情報共有、さらに他施設との連携等も考えていきたい。

2 研究協議

Q 大西先生の発表資料は何のツールで作成したのか。また、司書教諭はどのような仕事をしているのか。

A 資料のツールは基本的に全てWordである。いろんな情報を見て自分でまず下書きをし、それを忠実にWordで起こすという形。司書教諭については、業務の分担や先生方と図書館を繋いでいただいている。三課程ある本校は、三課程それぞれの先生方の合意が必要なため、管理職も含めた会議で諮り許可をもらってから活動を行うようにしている。その前に司書教諭と話し、情報共有を行っている。

Q ブクログの表紙が見える形での新着案内は、どのようにしたらできるのか。

A 県立で予算もないため、無料でできることはできるだけやるということを基本に運営している。司書教諭と確認後、図書館運営委員会にかけ、管理職の決裁をもらう。管理職からは情報を外に出すことを不安視する意見もあるが、司書は選書の理由を説明できるということの理解を得てから、タグなどを工夫して一般の方からは探せないような形にし、運営している。運用前には試すこともしている。

Q ブクログを利用する際はどのように問い合わせをされているのか。また、生徒が利用するポータルサイトの作り方を教えて頂きたい。

A 学校で使いたいという旨やそのほか質問も含めてブクログ側とメールでやり取りをした。ポータルサイト作成で使っているのはCanva。無料でもパスワードでアクセス制限ができる。ただ、階層を作れないなど機能に制約が多いので、パスファインダーなど自校資料をどう結びつけるかが難しい。Googleサイトを使い、外部にも見られる形で作成している学校もあるので、参考にされてはどうか。

3 指導助言

2つの発表では、たくさんの学校の楽しい、美しい、スマートな図書館の様子を、また、先生方が、最適化された学びを支える学校図書館をつくっていきたく日々奮闘されている様子を、大変分かりやすく伝えていただいた。利用者がますます多様化・多層化する中、学校図書館が生徒一人ひとりの学びに寄り添い、心を育む教育の場であるために、学校司書と司書教諭が連携し、教員と協働する体制は不可欠である。どうしたら協働がうまくいくのか。

一つは、「定期的な会議と情報共有」。協働のあり方としては、委員会と結び付けたり、校務分掌の中に位置づけたりして、定期的に会議や情報共有の機会を持つことが大切である。二つ目に「生徒の探究活動を支える資料・環境整備」。本日の発表では、それぞれの学校で図書館が、主体的な学びを促す「選択の場」として機能している様子を伝えていただいた。電子書籍や「カーリル」「ブクログ」の導入については大変可能性を感じるし、図書館が閉じられた空間ではなく世界に開かれている空間であるということ、生徒が使う端末機器は、現在の生徒たちに分かりやすく示してくれる。三つ目は「教員・司書間の信頼関係と役割分担の明確化」。関西外国語大学の新井肇先生は、学校組織の在り方として、教職員集団の協働性と同僚性について述べておられた。協働性 (collaboration) とは、異なる専門分野の人間が共通の目的のために対話し、新たなものを生成するような形で協力して働くこと。これは、お互いの強みをいかし、弱みを補い合う人間関係。そして、同僚性 (collegiality) とは、教職員が職場でお互いに気楽に相談し・相談される、助け・助けられる、励まし・励まされることのできる人間的な関係をつくりだすこと。学校図書館という職場において、私たちはそれぞれ自分ができることを広げ、互いに自分ができることをきちんと伝え合うことを大切にしたい。



編 集 後 記

このたびは、第42回九州地区学校図書館研究大会佐賀大会に御参加いただき、ありがとうございました。今大会は、コロナ禍を経て久々の実地開催ということもあり、半ば手探り状態で準備をしてきましたが、多くの関係者の方々の御協力、また各県からの多数の御参加により、無事に全日程を終えることができ、実行委員一同大変喜ばしく思っております。

大会期間中は、各行事を通して、各先生方、そして関係者の方々が、日々、読書教育および図書館活動に御尽力されている様子を窺い知ることができ、感嘆するとともに、多くの学びを得ることができました。各場面において、テーマに掲げた「豊かな心を育み、個別最適化された学びを支える学校図書館」の意味を考え、その必要性を感じながら有意義な時間を過ごせたことが、きっと今後の学校図書館活動につながっていくものと思います。

本研究集録の編集にあたっては、大会の様子を簡明にお伝えできるように努めました。日々の業務の合間にでもご覧いただき、大会を振り返るきっかけ、また、参加できなかった分科会への関心・理解を深めていただく一助となりましたら幸いです。

実地開催となった今大会は、直接交流することの意義を改めて思い出させてくれた大会でもあったように感じます。県内はもとより、遠くから佐賀に足をお運びいただいた皆様に、改めて感謝申し上げます。

佐賀大会実行委員会

**第42回九州地区学校図書館研究大会
佐賀大会研究集録**

発行日 令和7年12月20日

発行者 **九州地区学校図書館協議会**
(佐賀県学校図書館教育研究会)
会長 神 近 正

事務局 **佐賀県学校図書館教育研究会**
佐賀県唐津市石志字中ノ尾3072番地1
佐賀県立唐津工業高等学校内
電話 0955-78-1155 FAX 0955-70-3021

印刷所 大同印刷株式会社
佐賀県佐賀市久保泉町大字上和泉1848-20
電話 0952-71-8520 FAX 0952-71-8528

